

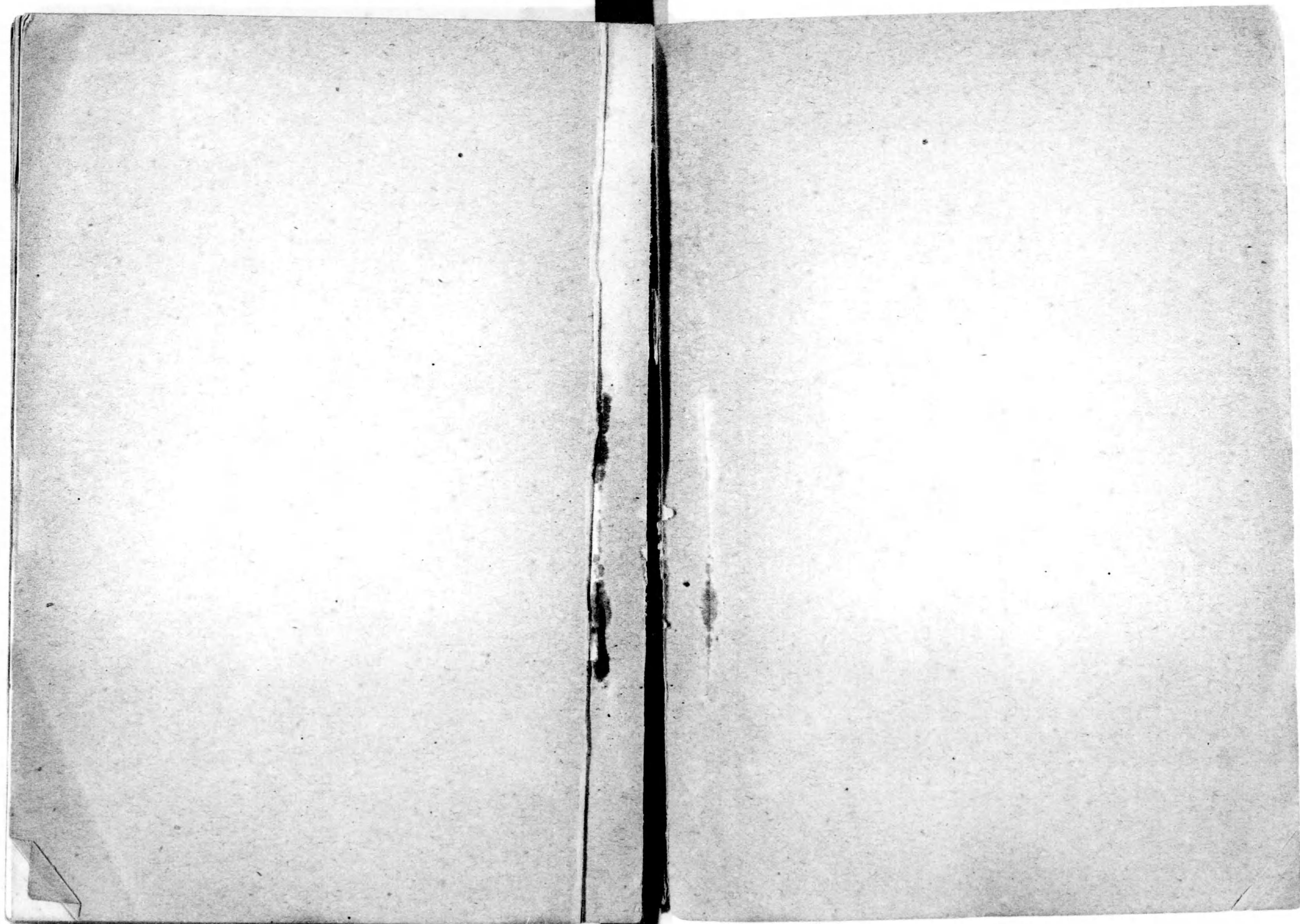
式主料
術成催



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

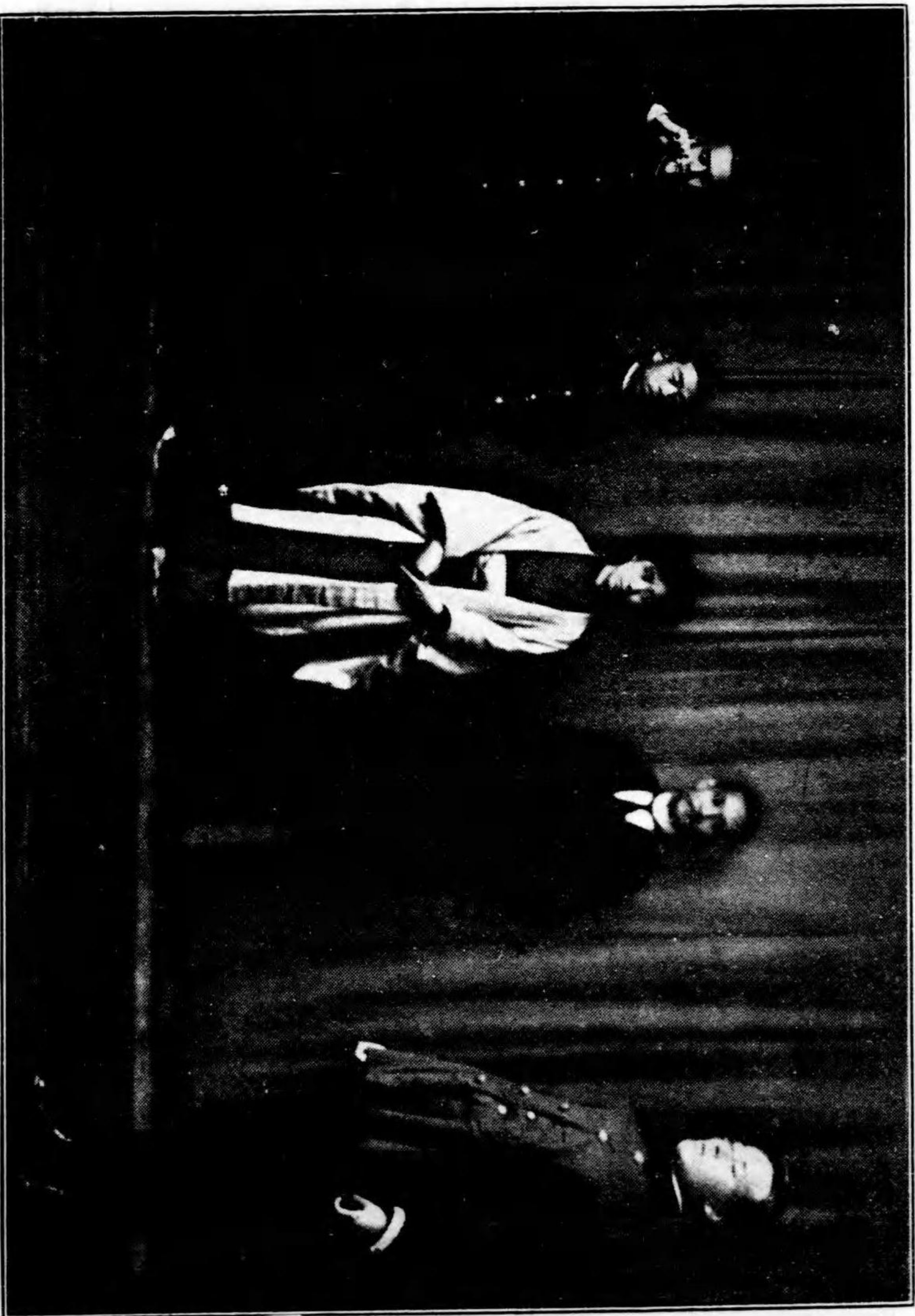
始



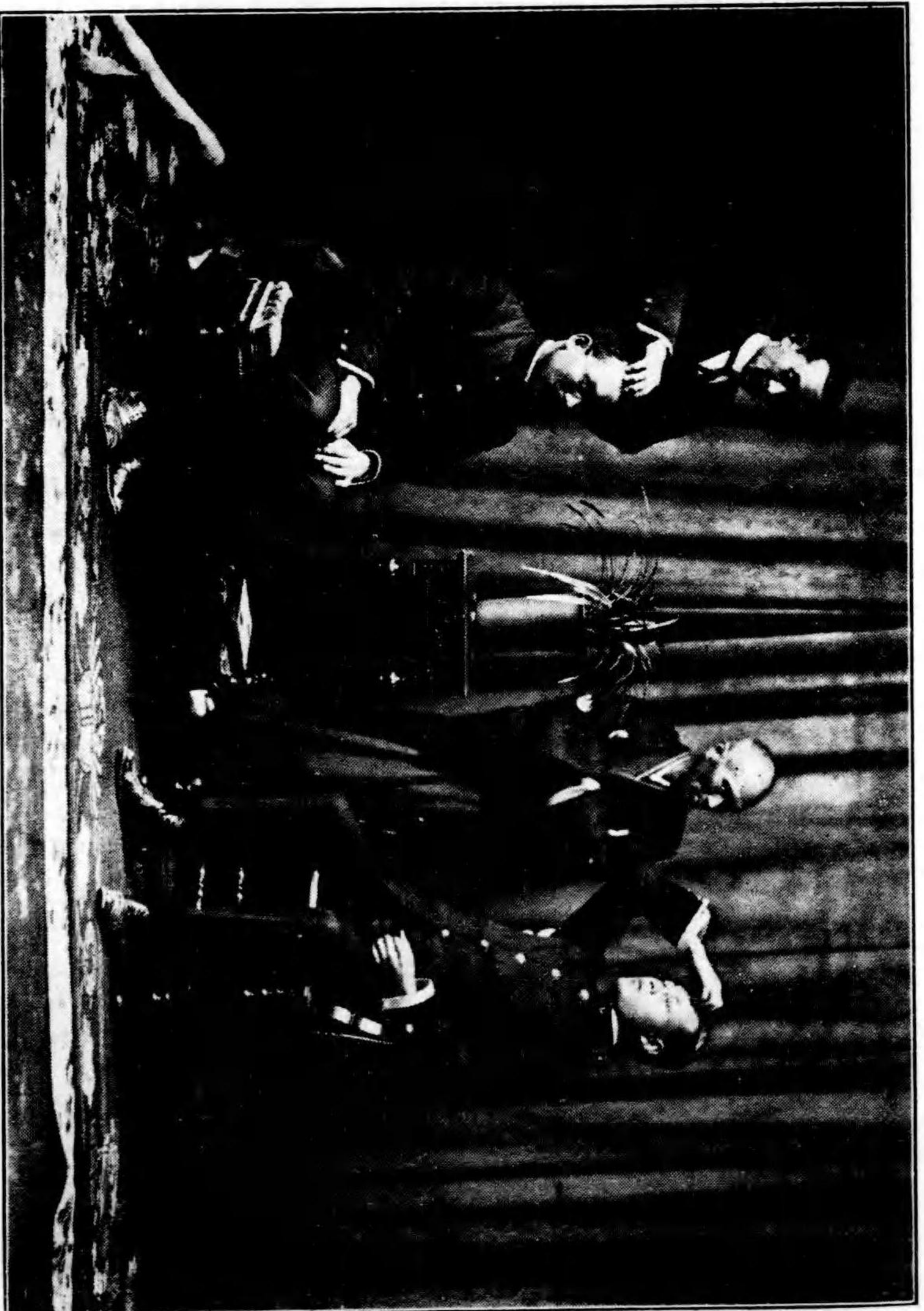


持 100
186

188
100



(照參驗實四廿第頁〇八第) く聽を音の計時中懷てにく遠



（照參頁七九第） 驗 實 の 通 感 用 作 神 精

村上式催眠術目次

第一章 總論.....
第二章 此術を行ふ心得.....
第三章 暗示.....
第四章 注意状態を普通状態にならしむる方法.....
第五章 被術者の年齢.....
第六章 心理實驗.....
第七章 治療及び矯癖に關する心得.....

—(なはり)—

(118)(57)(48)(39)(29)(9)(1)

大正
3. 10. 22.
内交

特100
186

村上式催眠術

文學士 村上辰午郎述

第一章 總論

(催眠術の名は不適當) 催眠術といへば、一種の不思議なる術と思ふ者もあれば、又は一種の見世物の如きものと思ふ人もあるが、それはいづれも誤れることで、これが不思議なるものでなくして、普通の心理作用殊に其注意状態に於ける働きを知り得るので、從來の如く無學者をして、見世物的に取扱はしむるにあらずして、教育及び道德と密接なる

關係を有するものであるから、教育者が主として研究すべきものである。而も現今多くの教育家にして、此心理現象を知らないがために、教育の上にも未だ及ばざるものがあると思ふ。注意三昧の状態といふのがほとんど、催眠状態などいふのは違つて居る。従つて、催眠術といふ名は適當でない、擬注術とか、感應術とか、又は暗示術とか呼ぶ方がいづらか適切であるが、今こゝで、かゝる語を用ひたりとも、多くの人には了解ができない。それ故、從來人々がいひ慣れたる如く、私も催眠術といふ名を、假りに用ひて述べて行くことゝするが、併し不適當なる名であることを、讀者諸君に於て承知ありたい。だんく述べるゝ其不適當なる理由も、了解ができる様になる。

(此術は教育者に必要) 教育家たる人が此術を學びて、如何に益を得るかといふに、學校にては、兒童生徒の顔の様子で、其心を察する事ができる。注意のよくまとまりたる子供であるか、又はまとまらぬ子供で

あるか、正直であるか、正直でないかは、其顔によりて知るを得るに至るのである。同じく人を教訓するとしても、教訓さるゝ人の心が他に向つて居る間は、あまり効のないものであるが、よく教育者の方へ注意を向けて、心のまとまつて居るときは、其教訓がよく先方の頭に入るのである。いふまでもなく、大に心がみだれて、注意のまとまらないのは、これを知ることができが、それ程でないのは、分り難い場合が多い。併し、此術によりて人に接するならば、たとへ、かすかなりとも、注意がまとまつて居るか又はまとまらないかを、能く察することができ。これを能く察し、其呼吸をはかりて、人を教育するならば、たしかに其効果は大となるべきである。また嘘を言ふて居るか、嘘をいはないかも、よく知ることができる。教育家でありながら、兒童や生徒の嘘を知る事のできないのがある。これはたしかに眞實である、これは嘘であるとの區別を、能く知ることのできない人がある。これが爲に、兒童や生徒にあ

ざむかれて居るが如き場合が随分あるが、此區別を能く知ることはどれだけ便利であるか知れない。注意のまとまつたときの顔はどうであるかといふに、眼つきは勿論、顔面すべての筋肉がヂツとして、むやみに、あちらこちらと動かないものである、また顔面のみならず、身體全部の筋肉も其通りになる。だから其人の後方に立つて見ても、其心がよくまとまつて、注意を拂つて居るか、どうかといふことが分る。此術の研究を積むことによつて、其區別を能く知るを得るに至る。

嘘をいふときは、其人の心は、まとまりのよくないものである。他人に嘘をいひながら、自分で自分を信ずる譯にはゆかない。自ら信ずる事のできないものによく注意を拂ひ得る筈がない。反之眞實の言葉には、自らよく信ずる所から、心がよくまとまるのである。だから、眞實を申述べて居る顔は、注意が能くまとまりたる顔と同じく、嘘を申立て居る顔は、注意がまとまらぬ顔と同じいのである。二三十人位に就て此術を

行ひたりとも、容易に此區別を知り得るではないが、多くの人に接して熟練するときは、容易に此區別を知り得るのである。

其外、記憶力の弱いのを強くするとか、書畫を巧ならしむるとか、怠惰なる人を勤勉ならしむるとか、不良なる癖を矯正するとかの益は、たくさんあるが、それらは此術を施す人よりも、施さるゝ人のためとなるので、それらの益に就ては、それらの實驗談と共に述ぶるとする。又病氣を治させることなども大なる益であつて、醫者として此術を心得て置く必要がある。術を施す人の側に於ける益を今一つ話すならば、此術を施す時でなくとも、人を教へ、人に講話をする場合に於て、よく人々の注意をまとめしめることができる。凡て此術は注意が主であるので施す人も施さるゝ人も、共に注意を能くまとめることがなくてはならぬ。故に此術に慣れたる人は、人々の集合の場所で講話をするとしても、また學校に於て人を教ふるとしても、其態度に落着きがあつて、従

つて能く人々をして、其講話や其教訓を聞きとらせ得るに至るのである。

(メスマル氏の術) 前にも述べた如く擬注術とか感應術とか、又は暗示術とかいふのが催眠術と呼ぶよりも大に適切であるが、私は今少し考へた上で、一層適切なる名を用ひたいと思ふ。又これも今述べた事だが、廣く催眠術として人々に知られて居るので、他の名では異なる感と與へることもあるから、今のところ催眠術として述べるが、併し、此催眠術といふ語が適當でないといふことも、一通り話さねばならぬ。世には催眠術の原語がメスマリズムであると思ふ人が多いが、それは間違つて居る。メスマリズムとは、メスマル氏の術といふことで、昔獨逸に於てメスマルといふ醫師があつて、其人が患者に服藥せしめず、其身體に觸れて、病氣を治することを發明した。これが即ちメスマリズムだ。メスマリズムは病氣を治するのみで、吾人が爲す如き種々の實驗が行は

ることは、氏は知らなかつたのである。氏が行つたのは、病氣を治するといふことに過ぎないので、今日の催眠術の上から見れば、其一小部分に過ぎないのである。且又其原理とも理論ともいふべきものは、現今の理論とは大に異なつて居るので、動物の體内に電氣があつて、健康なる人の電氣を病人に傳へる事によつて、其病を直すといふことができると思ふたのである。即ち氏の原理或は理論ともいふべきものは動物電氣説である。然るに今の世に於て、動物電氣などの説を立てる人はない時にさういふ言葉を用ふる人が無いではないが、それは一種の無學者のいふ所で、科學の上では動物電氣などの説は立てることはできない。現今の催眠術は、動物電氣の原理に基くものでない。メスマリズムは現今の催眠術の卵であるに相違ないが、併し現今の催眠術其物ではない。従つて催眠術をメスマリズムといふのは正しくない。

(催眠術の原語) それならば催眠術の原語は何であるか、それをこれ

から述べるとする。今より大凡百年許以前に、英國にブレイドといふ外科醫が居つた、其人がヒプノチズムといふ語を用ひた。催眠術とは、これの譯語である。何故にブレイド氏が斯る名を用ひたのであるかといふに、嘗てメスマリズムを公開的に行ふ者が英國に來た。ブレイドはそれを聞いて、そんなことができる筈はない。詐偽的の行爲に相違ない、自分はその席にのぞみて、其詐偽たる事を看破してやるといふ心で、其席に出た、ところが術者が被術者の眼に光る物を見せて、そして「モウ其眼は開かない」と言ふと、どうしても開くことができなかつた。ブレイドは之を見て大に驚いた。そして決して詐偽的の行爲ではなくして、醫家たる自分等も大に研究すべきものと信じた。そこで家に歸りて、その妻と友人とに花瓶や徳利を見詰めさせると、だんくんと眼が閉ぢて來た。そこで愈々以て詐偽的の行爲でないことをたしかめて、何でもかうして視神經を疲らせて眠らせねばならぬと思ふたので、そこで羅馬語の眠

りといふ語を用ひて、ヒプノチズムといふ名をつけたのである。ところが、今日私どもが行ふには、必ずしも眠らせねばならぬ筈はないので、能く注意をまとめしむれば足るのである。注意をまとめさせることが必要であるので、必ずしも眠らせねばならぬことはない。だから私は、催眠術の名が不適當だといふのである。併し現今行ふ如き實驗のいくぶんは、ブレイドが見出したので、氏の功は認めねばならぬ。

第一章 此術を行ふ心得

(私が行ふのは從來の方法と違ふ) 從來は催眠せしむる方法と稱して、被術者の眼に光る物を見せたり、身體を摩擦したり、頭部や頸部を壓したり、其他種々なる方法を用ひたものだ。私が行ふのは、それと大に異なつて居るのである。それらの方法の中で、用ひて不可のないものもあるが、また大に害のあるものもある。不可なきものに就ては後に述

べるが、先づ私が常に行ふ方法に就て述べるとする。

(被術者に言ひ聞かすべき事) 然らば私の方法は如何といふに、注意といふ事が必要であるので、よく注意し得る人は、感じ易く、注意のまとまりのあしい人は、感じがいくらかよくないことになる。たとへよく注意がまとまらないにしても、少しも感ぜないことはあまり多くない。なれども、被術者たる人が術者を冷評して居るやうな事では、よく行かない。私も、これがために 實験は思ふほどにならず、感じたのか、感ぜないのか、わけのわからぬやうな事が、ときどきあつた。これを以て、術者が拙なるものゝ如くに思ふのは、大に間違つたことである。冷評といふにいたらすとも、世の中にいひ傳へ、とんでもない間違つたことを信じて居るために、よく感ぜないことになる場合もある。それは、ごんないひ傳へであるかといふに、「賢い人は、催眠術などに感ずるものではない、よく感ずる人は、ボンヤリした人である」などいひ傳へらるゝ

ことである。「あの男は、催眠術にでも感じ易いやうな、ボンヤリして居る人だ」などいふ人がある。だが、それが大層の間違ひで、實際とは、全く反對のことをいひ傳へて居るのである。ほんとにボンヤリした人は、その感じもボンヤリである。よく注意をまごめ得る人が、よく感ずるのである。で、学校の生徒であつて、よく感ずる人は、たいていは、學校の成績もよろしい人である。何せかといへば、その人は、よく注意がまとまるからである。學校に於て、よく注意を爲し得る人が、その教へられたことを、よく記憶して、成績がよくなるので、その様な人は、此術の實驗に際しても、よく注意がまとまるから、よく感ずる。

それであるのに、今申したやうに、反對なことが、世の中にいひ傳へられて居るために、「よく感じて、ボンヤリした人と思つてはならぬ」などと思つて居つて、それが爲めに、よく感ぜない場合がある。いくらか長い時間をかければ、それも全く感ぜないではないが、速に感ぜしめ得る

のに、長い時間をかける必要がない。二十分や三十分はおろか、五分間をも要せないのに、「ボンヤリした人と思はれてはならぬ」と思ふために、一時間近くも要することがある。それには、チヨット心得をいひ聞かせば、よいのである。心得といふのも、別のことはない、今私が述べて來たるところどくに、ボンヤリした人が、よく感ずると思ふのは間違ひであつて、心のまとまりのよい人が、よく感ずるのであるといふことを、いひ聞かせるのである。それから、また、この様なことは思はないとしても、「危険なことはあるまいか、後になつて身體か精神かに害がありはせまいか」などと、このやうに思ひ居る人があつて、それがために、よく感ぜないことになる場合がある。であるから、「これは決して害のあるやうなものでない、その身體にも、その精神にも、害を及ぼすやうなものでない」といふことを、説き聞かすのがよい。

いくたびも、實驗を見たり、又は自ら被術者となりたることのある人に

は、よく分つて居るからよいが、さうでない人には「ボンヤリした人が感ずるとは間違つた申分で、よく術者のいふ事を信じて、注意をそれに専らとする人が感じ易いのである」といふこと、それに、「身體のためにも、精神のためにも、害などのあることは決して無い」といふことを、説く方が、都合がよい。必ず説かねばならぬといふではないが、その様に説明をした方が、向ふの人に安心させて、よく心をまとめしむることができ、凡てが都合よく運ぶのである。いかに都合よく運ぶからとて、嘘をいふてはいけない。眞にボンヤリした人が感じ易いのをば、左様で無い様にいふたり、また心身に害あるものをば、害なきがごとくにいふたりするのは、それはよくないが、實際ボンヤリした人は、その感じもボンヤリとし、又身體のためにも、精神のためにも、少しの害もないのである。それであるのに、世には反對に間違つたことが傳へられて居るので、甚だ妨害となるのである。ごういふ風の説明を爲してボンヤリし

た人が感ずると思ふ誤解と、心身に害ありと思ふ誤解とを、とくかといふに、それは被術者その人の教育の程度によりて、相當に申さるゝならば、それでよい。要は、なるべく要領を得るやうに、つとめて簡單でありたい。クドクしく述ぶるときは被術者をして退屈に感せしむることと成る。さうなると、また、いくらか、感ずるまでの時間を、多くせしむることとなる。

(心のまとまりを知る事) かくいひ聞かせて、それから、あとは被術者たる人が、果してよく心がまとまりて居るか、それとも、注意が足りないかといふことを、知る必要がある。それを、どうして知るかといふに、前に申述べたるごとく、その人の顔附にて知ることができるのである。眼附をはじめ顔面すべてが、ヂツとして居る人が、よく心をまとめ、注意をして居るのであるが、横を見たり、筋肉すべてが、ヂツとせないのは、よく注意をして居らぬのである。この二人をくらべると、ヂツとし

た人は、よく感ずるが、ヂツとせない人は、感じがよくないのである。だんく、諸君も、此術に熟達なさるならば、一眼見て知ることができやうになる。だが、初めの間は、それが判らない。判らないなら、實驗を爲すことはできないかといふに、さうではなくして、或方法によりて、被術者の心が、よくまとまりて居るか否かを、試験するのである。

(注意と手の運動) 前に述べたるごとく、どうして注意を知るかと云ふに、被術者の兩の手を前に出させて、術者たる人が「その手は開く」といへば、何のことなく、容易に開く、のぼるといへば、のぼるものである。手が開くといひて、ズン／＼と開き、のぼるといひて、ズン／＼とのぼる人は、たいていは、よく注意がまとまつて居る人である。さういふ人であるならば、皆が皆と申さぬが、たいていは、それ以上の實驗もできれば、また、病氣なども、心理治療によりて、比較的速に治し易い人であると云ひて不可はない。

ところが、この手の開いたり、のぼつたりすることが、よく運ばないで、
そして、その様にされて居る間に、直ぐと横を見たりする人の中には、
心のまとまりのあしい人が多い。さういふ人は、他の實驗もよくできな
ければ、また病氣なども、心理實驗中に於て、直ぐと治し難い。(中には
さういふ人でも、治するのがないではないが)だから、この様に心のま
とまらない人であるならば、「モウ少し氣を静めよ、他のことを思はな
いで、此方のいふことに、よく氣をまとめよ」と、説き聞かせるがよい。
そのやうにすれば、はじめに於て、まとまりのあしい人も、だん／＼と
心を静めて、よく注意するにいたるのである。何のことはない、此方の
いふことに、疑念をいたく事なくして、それを信ずる人であるならば、即
ち注意が強くなるによりて、手を開くといへば、直ぐと開き、のぼるこ
いへば、直ぐとのぼるにいたるのである。之を學校生徒に就て試むる
に、この實驗がよく行はれ得る人は、たいていは、學校でも成績のよい

生徒であるが、反之、この實驗がよく行かない人の多くは、學校でも、そ
の成績が、あまり、よろしくない方である。何故かといふに、注意のま
まるか否かによりて、この心理實驗も、よく行はれると否との差が生じ、
學校でも前に述べた如く、よく注意をして先生のいはるゝことを聽く
者は、自然と成績が良くなり、注意の足らない生徒は、成績も良く成り
難いからである。ボンヤリした者がよく感ずるなどは、思ひもよらざる
ことである。諸君は、だん／＼實驗をなさると、今私がいふたことが、
よく了解になるに相違ない。成績のよい生徒がキット開くこと、のぼる
ことは、速かである。また諸君は、自ら手の開くことを試みなさるもよ
い。何も思はずに、開くといふことのみを思ふて居らるゝならば、それ
だけ注意が強いので、手はズン／＼と開く。また、のぼるといふことを、
一心に思ひ居らるゝならば、手はズン／＼と上る。ところが、「他人の
實驗のときは、よく開いたが、自分にはどうであらう、開くか、開かない

か、ごんなものであらう」などと思ひ居るならば、手はよく開きはせぬ。これ前の場合には、よく心がまとまりて、注意となり居るが、後の場合には、疑念が多くして、眞の注意となつて居らぬからである。

(注意と眼) それからまたチョット眼を閉ぢさせて、「その閉ぢたる眼の上下兩脛が、だんく密着してくる」といひ聞かせ、その通りに、ズンく上下兩脛がくつついてくるならば、注意はよくまとまり居るものと見て差支はない。「チョット眼を閉ぢなさい」といひて、そして「あなたの脛は、上と下とだんくくつつくよ」といひて、その眼をよく見て居ると、心のまとまり居る人は、いはるまゝに、兩脛が附着する。之は手がズンく開くと同じい譯である。ところが、このやうにいはれても、脛が元のまゝで、少しも附着せないのは、手が開かないと同じく、よく注意ができて居らぬのであるから、さういふ人には「今チット、心を静めて、餘計なことを思はず、附着するといふことに信を置くがよい」

ど、いひ聞かすことである。

ツマリ手か、眼かによつて、その人がよく注意し得るか否かを見るのであつて、どちらかといへば、拙い方法であるが、諸君が、はじめに行はるゝには、この方法がよい。術者が被術者に向つて、「この人はよく感ずるかどうであらうか」など思ひ居る様では、確信が足らぬので、被術者をして、よく感せしめ難い。「必ず自分で感せさせる」といふ信が必要だ。術者も信、被術者も信で成立つのである。注意といふのも、感化といふのも、みな信から生ずるのである。だから、被術者の信が不足しては宜しくないが、ごくに、術者としては尙更自分でこの人を必ず感せさせるといふ確信といふものが必要である。教育家が學校で児童生徒を教導するとしても、自分でよく信ずるものでなくてはならぬ。一夜漬によい加減な調べをして、よく知りもせないのを教ふるやうでは、児童生徒をよく感せしめることはできぬ。「自分の述べることに少しも間違ひな

い」と確信することによりて、よく感化を與へ得るのである。それと同じく、此術に於て、術者は殆んど教育家と同一の地位に立つのであるから、よく確信がなくてはならぬ。だが、この實驗には、十分慣れない間は被術者たる人の注意如何を知ることができぬ。前にも話をしたるが如くに、その人の顔色にて注意が強いか、どうかは、たいていは知ることができるのであるが、諸君が、まだよく慣れない間は、被術者の心を知りつゝ、行ふが一番よいので、それがために、手の開くとか、のぼるとかで試み、又は眼で試みる必要があるが、いつまでも此方法でやらねばならぬといふのではない。

(眼に物を見せるは良くない) 私が今申したるのは、本人に求めて眼を閉ぢさせて、そして「密着する」との言葉通りになるか否かを見るのであつて、そして後に、「その眼は開かない」といへば、開くことはできない。「開くぞ」といへば、直ぐ開くのである。そして、それらのことを爲

すに、前後合せて二三分間以内にて足るのである。ところが、これまでは、被術者の眼に光る物を見せて、だんくゝと視神経を疲らせ、その疲れのために眼が閉づる様に仕向けたものである。それは初めに申述べたる如く、英國のブレイドなる人が行ひたる方法で、今もたいていの人はその誤れる方法を、そのまま、用ひて居る。擬視球とか、催眠球とかいふ名をつけて、一種の球を用ひ、それを被術者の眼の前に突き出して、五分間はおろか、十分間も、二十分間も、それを見詰めさせるので、かういふ方法では、視神経を疲らせるのみならず、時には脳神経にも害を及ぼすに至ることがある。そして害が無いなどいふのは、大なるあやまりである。又害の有無は別問題としても、左様なことを爲す必要は更にないである。中には擬視球なるものを賣り、そして、その廣告文中に、「之を用ふれば、何人をも催眠せしむること容易である」などと、書いてあるが、こんなものは少しも必要がない。諸君は、こんな物を用ひて行ふ

様なことがあつてはならぬ。若しも從來かゝる方法にて行ひたる人ならば、速に改めて貰ひたい。時計を見詰めさせたり、術者の指尖を見詰めさせたり、又眼と眼とを睨み合ひをさせたりするのも、今申したと同じい方法であつて、その必要は更になく、宜しく廢止すべきである。ところが、今も十中八九の人は、これらの方法を用ふるのは、よく譯が分らぬからだ。分つて居らない人が行ふのだから、すべてのことに間違ひが多い。諸君は、さういふ方法を眞似てはならぬ。

(身體を倒す事) 手と眼で被術者の心のまごまりを知る外に、今一の方法がある。それは被術者を後向に立てさせて、術者はその後方にありて、「汝の身禮はだんく」と倒れるよ」といふのである。ところが、これも手や眼と同じく、倒れるといふことをよく信ずる人であるならば、直ぐと後方へ倒れる。なれども、それを信せず、注意といふことができて居らぬ人であると、手がよく開かず、眼の險がよく附着せないがごとく

に、なか／＼倒れない。倒れぬのはよいのでなくて、心がまごまらないからのことである。心のまごまりたる人は、直ぐと倒れる。それならば、直ぐ倒れる人が多いか、直ぐと倒れない人が多いかといふに、諸君は、倒れない人が多いであらうと、考へらるゝでもあらうが、實際は左様でなくして、倒れる人が多いのである。これも三分や四分の時間を要するでなく、直ちに倒れるのが多い。即ち人はその場合々に注意をするのが、ほんごであるからである。

手や眼の實驗でも、よく感せないのは少數で、寧ろ多くの人は、直ぐと感するのである。なれども、手がよく開かず、眼險がよく附着せない人があるがごとくに、能く倒れない人がある。さういふ人にも、「よく氣を静めなさい、疑念を去りなさい」といふ風に、たび／＼いひ聞かせると、たいていは感ずるに至るものである。そして、諸君が、よくこの實驗に慣れると、倒れるよといはない前に、後向きに立てさせたまゝで、よく

その人の心を知ることができ、前に述べた如く、その顔を見れば、心を知ることができ、顔を見ずして、後方で衣服の外から見ても、たいていはその心を知ることができ、よく注意せる人は、いくら「氣をつけ」の時の如き姿勢を爲し、身體すべてが、キチンとなつて居るが、術者に對して疑念を有して、「おれにやれるなら、やつて見ようとしてやれるものか」などと、冷評的精神を有するが、また、それほどでなくとも、倒れるいふ事に注意が能く向かないならば、その人の身體は、ガヤ／＼と不規則に動き、甚だしきは後方を振りかへりて、術者の様子を見たりする。かういふ人はたいていは、よく感ぜない。かういふ人には、その不心得を説き聞かせて、その心を静めてよく注意せしむる様にするのである。いくたびも倒れることをやつて見て、よく倒れるまで行ふもよい。手や眼もその通りで、よくなる迄行ふもよい。最初はよく行かなくとも、たいていは、かうして心を静めよと命じつゝ、

いくたびも行ひつゝ、ある間に於て、必ずよく行はれ得るに至るものである。被術者が倒れんとするとき、術者は、兩の手にて、シツカリその脊を支へて、靜かに臥させる事を忘れてはならぬ。後方へ倒れるのだから被術者は、それがあぶないと思ひ居るために、倒れるといふことに注意ができない場合があるから、術者たる人は、被術者に對して、「私が後方にてあなたの身體を受けるから、大丈夫だよ」といひ聞かせるがよい。併し中には、私の此説明によりて稽古しつゝ、ある人を見るに「私が受けるから大丈夫だ」といひながら、碌に受けもせず、被術者が倒ると、術者も驚いて、後方に飛びさがるのがある。それでは、言葉ばかりで、何にもならぬ。十分の身構へをして、手で受けるのでなくてはならぬ。何せ此必要があるかといふに、頭を床に打つ様な事があつてはならぬからである。ところが、よく感ずる人であると、倒れると共に、身體に重味が加はつて、術者が脊を受けても、その「腰のあたりが、早く床に着かんとす

るのがある。さういふ時には、重味の勢ひで、ドツカリお尻を床におろすことになるから、左様な場合には、「ドツカリ床に着いても、少しも痛くないよ、大丈夫だよ」と、大聲にていひ聞かすことである。すると重味のために床上に着しても、痛くはないが、それをいはないと、勢ひが強いために、痛く感ずるやうなことが、時にはないではない。勿論これがために痛いと感じるやうなのは、極めて稀であるが、念のために「痛くないよ」といひ聞かせることである。「そんなに言ひ聞かせたて、何の用を爲すものか」など思ふ人が随分有ること、思ふが、それは心理上の作用を能く知らないからのことで、よく術者の言を信じて、それによく感じて倒れる程の人であるならば、痛くないといへば、その通りに感ぜなくてはならぬ。

(氣を静めの一言) 手や眼又は倒すことによりて、被術者の心を知りつゝ、感ぜしめることの外には、「氣を静めよ」との一言にて感ぜさせる

のである。椅子に腰をかけさせて置くことも、又は坐らせたまゝでも、臥させたまゝでも、乃至立たせたまゝでも、どちらでもよいが、「眼を閉ぢて氣を静めよ」といへば、それで足りるのである。眼を閉づるから眠るものと思ふ人があるが、それは眞に眠るでない。それ故、催眠などの名は、不適當である。眼を開いて居つては、周圍に心がうつりて、よく心を静めて、術者の言葉に對して注意を専らさせしむることが難い故、眼を閉ざさせるので、必しも閉ざせなければならぬといふのではない、よく注意がまごまる人であるならば、眼は開いたまゝで足るのである。私はいは、この氣を静めよとの一言にて感ぜさせることにして居る。(摩擦法) それから又被術者の身體を摩擦するのもある。手の甲を摩擦して、注意をそれにまごめしめ、又は衣服の上から、肩のあたりより胸へかけて、術者の兩の手で撫で下げることを、いくたびも爲して、それに注意を向けしむるので、これは眼に物を見せる方法とは異にして、

害はない。しかし、可なりに時間を要する。だから、如何にしても注意を向け難いといふ人に限つて、此方法が必要のこともあるが、たいていはこの方法は必要でない。しかし、この方法は行つてならぬのではなくして、用ひても、少しも害のない方法である。

(其他の方法) 今述べた外に、種々の方法がある。その一例は、被術者に一から十までの數を言はせるとか、念佛をいはせるとか、または題目とか、アーメンとかを唱へさせて、心を静めさせるのである。調子の上からいふならば、アーメンを唱へさせるよりも、南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經とかいふのが、都合がよいやうである。毎朝佛前にて南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經とかを一心に唱へて居る間は、他事を思はずして、殆んど無我の境に入つて居るのである。だから、毎朝佛前にてこれを唱へるは修養の上からいつても、あしいことではない。爺さんや婆さんが之をやらるゝからとて笑ふべきことでない。心をそれに専らに

して、南無妙法蓮華經や、南無阿彌陀佛を唱へるのは、たしかにその心を清くする方法である。自分は爲さずとも、他人が爲すのを笑つてはならぬ。しかし、南無妙法蓮華經では、變なものになる。中には南無阿彌陀佛や南無妙法蓮華經を唱へながら、佛前にて、嫁などを悪い〜と思ひ居る婆さんもある。かういふのは心を清くするよりも、ますます濁らすものである。世にはかういふ婆さんが随分ある。又南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經とかが、アーメンよりも調子がよいにしても、基督教信者に南無妙法蓮華經をいはせても、益にならず、日蓮宗信者に南無阿彌陀佛を唱へさせても役を爲さぬ。自ら信するものを口にするといふことがよい。

第三章 暗示

(暗示と感化) 暗示といふことに就て、少しく長く話をしたいと思ふ。

話の半ばへ、餘計なことを加へるもの、如くに思はるゝかも知れませぬが、實は餘計なことではないので、講話の順序として述べる必要がある。暗示とは、英語のサゼクションを譯した言語であつて、巧なる譯語とはいはれぬが、今日のところ、暗示として廣く知られて居るから、私もそのまゝの譯語を用ふるのである。これに就ての説明は人によつていろいろと違ふところもあるが、最も單簡に而も最も動かないところをいふならば、この暗示とは感化を與ふる力であるといふのがよいと信ずる。人に感化を與へ、人を左右し得るのは、即ちこれ暗示である。言語なりとも、行動なりとも、その他何なりとも、人を感化し左右し得るものは、これ即ち暗示である。心理實驗には、これが大切であるが、凡ての教育には、此暗示が必要である。教育とは人が他の人に及ぼす感化であるとは、これまでの教育學などに述べたのであるが、その所謂感化は暗示によるのである。暗示が善良であるならば、善良なる感化を與へ得

るが、暗示が不良であるならば、感化も不良となる。又醫士として患者に暗示を與ふることも、これ、たしかなる事實である。

(暗示の區別) 今暗示を實際上の方面より區別すると、言語暗示、行動暗示、言語行動暗示、習慣暗示、名位暗示、物質暗示、人格暗示等となる。その外に殘續暗示といふのがある。しかし、これらは、私が區別したもので、他の人がいふて居るものではない。金刺芳流堂發行の最新式實驗催眠術講義に於て、私ははじめてこの區別を世に公にしたのである。今その各に就て、一通りの説明をする。

(言語暗示) これは言語のみで感化を與へる力をいふのである。此術の實驗の多くは言語暗示によりて行ふので、それは後に述べる。これによりて、如何に言語の力が大であるかといふことを、諸君は、御了解ができることとなる。

(行動暗示) 此術の實驗中、被術者をして、術者の身體に注意せしむる

時は、被術者は術者の行動を模倣するに至るものである。たとへば、術者が右の手をあげるならば、被術者も、ひとりでに、右の手をあげる。術者が歩み出せば、被術者も歩み出すことになる。かくの如きは、平日に於ても有り得ること、父母や教師の爲す所に、子女兒童生徒が眞似るに至るは、人のよく知る所である。

(言語行動暗示) 言語と行動とが同時に働きて、人に暗示を興ふることがある。石佛を信じ、老樹に祈りて、病の治癒したるが如きは、是によりて説明することが出来る。即ち「何寺の石佛はたいさう御利益がある」と世間にいひふらせるその言語が、それを信する人に對しての暗示となるのであるが、また數多の人々が參詣に行く、その行動が、また暗示と爲りて、いよいよますますその信を強からしむるのである。いかに御利益があるとの評判が高いにしても、それを信することのできな人には、暗示となり得るのであるが、それを信する人のためには、

言語と行動とが同時に暗示即ち感化を興ふるの力となるのである。此術の實驗に於ても、術者の言語と行動とが感化を興へる場合がないではない。言語のみでは、未だよく感ぜざる被術者があるときには、言語とともに、行動を用ふるのである。例へば、「汝は速に歩む様になつた」との言語暗示のみによく感ぜない人であるならば、かくいひつゝ、術者が速に歩んで見せるのである。かくすれば言語のみよりも、よく感じ得る場合が多いのである。

(習慣暗示) 俗に「一度あることは二度あり、二度ある事は三度ある」といへるは、これ全くの事實であるといひて不都合はなからうと思ふ。凡て人は、爲し慣れたることは、再三爲し易き傾向を有するものである。善良なる行爲を爲す人は、益々善良なる行爲を爲すに至り、不良なる行爲を爲す人は、益々不良なる行爲を爲すに至るものである。他人の善良なることを見出すことをつとむるものもあれば、不良なることの

みを見出して、善良なることを見出し難い人もある。また他人をあしくいふことのみを、自分の本務であるかの如くに思ひ居る人もあれば、反之、他人のよろしいことのみを見出すを欲する人もある。これらは、みな、習慣暗示によるのである。キタナイ話で失禮ではあるが、或人が嘗て停車場へ来て、小便がしたくつてたまらなかつたが、汽車は今しも動き出さんとするので、小用をも辨せず、それに乗り込んだが、折あしくも、其汽車には、便所がないので、たいさう困つた。ところが、其人は、その後、停車場へ来て、ブラットホームを出でんとする毎に、必ず小用がしたくなる様になつた。これも習慣暗示である。かういふ事は、しらべて見れば、たくさんにある。私の知つた人で、初めて面會する人に、はじめて言葉をかけんとするに際して、必ず右の手を頭上にあげるのがあつた。見苦しいから止めよといふと、本人は頭に手をあげる如きことを爲したるは更に無しと申して居る。即ち自ら知らずにやつて居るので、そ

れも初めにかゝることを爲したので、遂に習慣上ひとりでに、かゝることを爲す様にできて居るのである。學校生徒で學校へ早く来る人は、いつでも早く来るが、遅刻する人はいつでも遅刻するものである。遅刻株式會社の株主となつて居る。この早く来ることや遅刻することも、習慣暗示によつて、説明することが出来る。

(物質暗示) 人の容貌、衣服、住家が、他人の心を動かすは、これ物質暗示である。容貌の良い人は、愚であつても、賢く思はれるが、容貌が良くないと、賢くとも左程でもないやうに思はれる。また衣服がよいと、エライ人の如くに思はれるが、衣服がよくないと、人から疑はれるやうなこともある。容貌が良くなつて、衣服がまづくしては、旅館に入つて泊らんとしても、斷られ、容貌が良くつて、衣服がよいと、奥の上等へズンと通してくれる。私も旅館で斷りを食つたことが、たびくである。此術にても、術者が容貌がよくて衣服がよいと、それがために被術

者をして信を置かしむるに足るので、暗示の力が強くなる場合がある。だから、或人の催眠術書には、衣服に注意する必要があると記してある。又家が立派であると、それに住む人までもエライ人の如くに思はれるのも物質暗示の一である。

(名位暗示) 名醫の薬が人の病を治せしめ、名家の演説がよく人を感動せしむるが如き、又は高級の人が他人の心を動かすが如きは、これ名位暗示の力によるものである。名のある人が違へることは、それ程に感服するほどのことでもなくとも、大に感服する人が多いが、その名が知れて居らない人のいふことは、實際に於て大に感服すべき事でも、あまりよく感服せない人が多い。またその位が高い人の言葉は、低い人の言葉よりも、人を動かす力は大きなものである。だから名あり位ある人は、よくその言葉を慎むべき事は、名なき位なき人よりも一層肝要であるので、その責任の大なる事を自ら知らねばならぬ。此術も、名あり位の

高い人であるならば、それだけ人を感化する力が強くなる譯である。

(人格暗示) 修養を遂げて、その人格高き人は、他人を動かすに足るは、多言を要せずして明かである。人格暗示に對しては、物質暗示、名位暗示はその効薄きに至るも、言語暗示、行動暗示、言語行動暗示は、ますますその力を加ふるに至るのである。即ち其人格が高いならば、容貌は、どうであらうが、衣服がどうであらうが、その住家がどうであらうが、それらには頓着なく、その人格そのものが、強き暗示となつて現はるのである。又その名が世に知れずとも、その位が高くなくとも、人格が高ければ、人を動かすに至るので、その人の言語や行動は、よく人を化するに足るのである。教育も主として教育家の人格暗示によりて効を奏するのである。人格を高くし、よく感化の力を大ならしめんとするには、何といつても、誠實の徳が必要である。だから、此術實驗を行ふにあたりては、被術者の爲を思ふでなくてはならぬ。然らずして、被術者を

利用せんとするが如き心では、自らおのれを信ずるに足らず、自ら信ずるを得ざる人は、他人をしてよく信せしむるに足らない。

(残續暗示) この残續暗示といふのは、或時與へたる暗示が、後までも續くのをいふので、上に述べたる各種の暗示と、相ならぶものではない。上に述べたるいづれの暗示なりとも、後までも残り續くべきものである。術者が被術者に、向ひて、「汝は何時又は何日に、かくくの行爲をなすよ」と暗示を與ふる時は、被術者はその指定されたる時間又は日に於て、その通りの行爲を爲すのである。しかし、それは本人の爲になることを命ずるでなくてはならぬ。然らざるに於ては、術者の誠意が缺乏せるのであるから、効を奏する筈はない。以前私の家に居つた下婢は、不潔なることを平氣で居る性質のものであつた。私の家で、母や愚妻が、どれだけ教訓しても、それには少しも服しない。自分の肌着までも洗濯するを好まずして、三ヶ月も洗濯せなかつた。そこで、私は當人に

殘續暗示を與へた。「汝は、明日午前十時頃になると、必ず湯をわかして、肌着の洗濯を爲せよ」といふ暗示を與へたのである。そしてそのいはれたことを忘れさせて置いたのであるが、翌日に至りて、指定された時間に於て、湯をわかして、肌着を洗濯をした。その時、愚妻が下婢に向つて、「これまで隠居様や私が、洗濯せよといつても、少しも聞入れなかつたお前が、何せ今日洗濯をしたのか」とたづねると、本人は「何んだか知りませぬが、今日はどうしても洗濯せねばならぬ氣になつていました」と答へた。かくの如きは、これ殘續暗示の一例である。外にかゝる例は少くない。

第四章 注意状態を普通状態

にならしむる方法

(舊式の所謂醒覺法) これよりは、從來の言葉を用ひていふならば、醒覺せしむる方法、この方法に就て申述べるのである。だが醒覺せしむる方法とか、催眠状態より解く方法とかいふのは、頗る不適當なる言葉であるので、注意三昧の状態より、普通の状態にならしむることである。また方法といふほどのことがあるではない。從來人々がやつて居るのを見ると、實に餘計なことを爲して居る。第二章此術を行ふ心得として述べたこと、即ち最初の注意せしむること、即ち彼等、舊式の催眠術を業とする者共の言葉でいふならば、催眠せしむる方法、これが既に誤つて居るが如くに、最後の方法も、また誤つて居る。被術者の顔に、下から上へ向けて、手で軽く風をあて、醒覺せしむると云ふ様なことを爲して居るのもある。かういふ人の多くは、初め催眠せしむるに、上から下へ術者の手で、風を起して、軽く被術者の顔にあてる、かういふことを、二十分間も三十分間もくりかへして、そして注意三昧の状態、彼等

の所謂催眠状態に導くのであるが、それを醒覺せしむるに當りては、遂に下から上へ、手で風をあてるのである。手で風をあて、催眠せしむるのは、第二章では述べなかつたが、之は眼に物を見せるのに比すれば、何等の害もありはせぬが、しかし、長い時間を要して、餘計な方法である。といはねばならぬので、諸君は、かういふ方法を用ふるには及ばない。たとひ最初に斯くして手で風をあてたのでなくとも、彼等の所謂醒覺せしむるに當りては、逆に風をあてる方法を用ふるのが多いのである。それからまた、所謂催眠せしむるに當りて一喝法など、呼びて、大聲一番喝を加へるのがある。さういふ人は、たいていは、最後の所謂醒覺せしむるにも、また一喝法を用ふるのが、少くないやうである。外にまだ、いろいろなる方法がある。術者が手を以て、被術者の眼瞼を無理に開き、そして、自分の口で、眼の中をプツと吹くのもある。これも拙の拙たるものといひて、過言でも、失禮でもない。それからまた、一層拙劣

なのになると、一種の臭氣あるものを嗅がせるのである。アムモニヤを嗅がせたり、酸氣あるものを嗅がせたりするのである。害の有ると無しとは別問題としても、この様なことを爲す必要は少しもない。且又害無しとはいはれないのである。アムモニヤなどの類を嗅ぐに於ては、その臭氣が鼻について、たとひ臭氣のなき場合に於ても、臭氣を感じるに至ることがある。又その不快のために、遂には腦をあしくするに至ることもないとは限らない。それが直接に腦をあしくするでないとしても、臭氣に對する不快のために、頭が痛くなることがある。

(言語のみにて普通状態とする) それならば如何にするればよいかといふに、何のことはない、「モウよい」との一言で足るのである。私が見ただかういふのみでは、私の實驗を一回たりとも見たことの無い人は、さう容易にできるものかと、疑念を有するであらうが、一回たりとも、私の實驗を見たる人は、よく了解ができるのである。又中には、眠つて

居るのであると思ひ居る被術者があるが、さういふ被術者に對しては、「モウよい」といはずして、「醒めた」とか、「醒めよ」とかの言葉でもよいが、たび／＼申述べたるが如くに、眠るのではないから、醒めるといふ言葉も適當ではないのだが、これまでは、眠るものと思ひ居る人が多い、それらの被術者に對して、一々その説明をして聞かせる必要があるでもなく、又その譯を聞かすとも、容易に譯の分らない人もあつて、眠ると思ひ居るのがあるから、さういふのには、「醒めよ」といひてもよい。なれど、眠ると思ひ居る人は、悉皆醒めよといはねばならぬのかといふに、決して左様なることはない。「モウよい」の言葉で足るのもある。一度の言葉で、まだよくない様な場合があつたならば、二度いふがよい、二度でもよくないならば、三度いふのである。しかし、諸君が熟達なさるならば、二度や三度といふ必要を見ない、必ず一度でよいと、斷言するを憚らない。けれども、熟達せない間には、二三回はおろか、四五

回も呼ぶ必要がある。熟達は確信力を有せしむるに至るもので、一言たりとも、確信力を以ていふことが、必要である。確信力があるならば、効があるが、確信力がないならば、効が薄いので、それは凡ての事に於て然りであるとは、私が今あらためて喋々せずとも、諸君に於ては、能く御了解であるに相違ない。

(言語と共に手をたたく) 又言葉と同時に、手をたたくもよい。『モウよい』と言ふと同時に、手をたたくのである。しかし、かうして手をたたくなくてはならぬやうなことも、熟達すれば、滅多にない。私は今は、かかることが必ず必要であるとは思つて居らぬのであるが、熟達せない間には、手をたたく必要も、なきにあらざるである。

(肩か脊を軽く打つ) また手をたたくてよくないならば、被術者の肩か脊を、ポンと軽く打つもよい。だが、手をたたくすら必要がないから、此肩や脊を打たねばならぬ様なことは、殆んどないのであるが、念のため

めに申して置くのである。如何に十分なる熟達がないとしても、一通りの心得があるならば、滅多に肩などに手を觸れる必要を見ないのである。私の方針は、注意三昧の状態に置かしむるにも、また注意状態よりして、普通の状態に立戻らしむるにしても、一切被術者の身體に接觸せないのだから、肩や脊を軽く打つのも、好むところではないのである。一切言葉でやるのである。なれど、肩や脊を軽く打つ位は、害はないことである。

(術者の確信) 何にしても、術者の確信力といふのが大切である。ところが、極不熟練なる術者は、一度聲をかけても効なく、二度呼びても効なき様なことがあると、度を失ひて、狼狽することがある。かうなると、いよ／＼ますます効なきに至るものである。確信さへあれば、決して困難ではない。時には、醒めないとして醫士を迎へにやるなどのことがあるが、醫士が來たとて、効のあるものでない。迎へにやる人も、やる人であ

れば、来る醫士も、醫士である。確信があつて、やつたものであるならばさういふことは、殆んどないのであるが、萬に一にも、今いふた様なことがあらなければ、醫士を迎へずとも、その儘にして置けば、自然と、普通状態になるのである。それであるのに、彼の無學者にして催眠術を業とする輩が、著したる著書を見ると、醒覺せないなら薬品を用ひよとか、水で頭を冷せなごいふことを、書いてあるが、大なる心得違である。(忘れてならぬ言語暗示) それからまた、今一つの心得として述べて置かねばならぬことがある。それは被術者に對して、「キット頭は軽く、眼もハッキリ開く」といふ暗示を與へることである。「モウよい」とか「醒めよ」とかいふ前に、之をいひ聞かすのである。何のためにかかる暗示を與ふのであるかといふに、注意集中の結果として、血液循環などは、平日よりも異なるものがないではない、よく心理上の實例にも人々が引用することであるが、他を忘れて、指頭のみ注意をするときは、

血液はその指頭に集り来るものである。かういふ譯であるから、普通状態に戻らしむる際に、ウツカリして居ると、被術者の頭が痛いといふやうなことがないではない。これは注意三昧の状態からして、急に普通の状態に戻る爲に、血液循環に變化を來すからである。しかし、これは眼に物を見せられて頭が痛くなるのは、大に違ふのであつて、一時的である。一時的ではあるが、痛く感せしめないために、如何なる場合に於ても、如何なる被術者に對しても、「心身共に異状なく、頭は軽くして、眼もハッキリする」といふ暗示を與ふる事を忘れてはならぬ。かく暗示を與へても、頭が軽くない、眼がハッキリせないやうな人が、稀ながらもあるならば、再び眼を閉ぢさせ氣を静めさせ、そして「今度こそは、頭が軽い」とか、或は「眼がハッキリする」とかいふ暗示を與へるのである。又頭が軽いのと眼のハッキリするとの二つの暗示を同時に與へてもよい。しかし、必ず頭が痛くなるとかいふことはない、寧ろ稀なる

場合であるが、然かし、防禦として、何時に於ても、此暗示を與ふることを忘れてはならぬのである。ただ念の爲に、此暗示を與ふるに上越したことはないとはいふ所からして、必ず何時でも、此暗示を與へなさいといふのである。

第五章 被術者の年齢

(感ずる年齢) それから被術者の年齢である。何才ばかりの人がよく感ずるかといふ様なことを申すのではない。諸君が練習せんと欲せらるるならば、何才ばかりの人に就て行ふのがよいかといふことを述べらるものである。中には、少年がよく感ずるが、大人は感ぜないとか、女はよく感ずるが、男は感じ難いとかいひ居る人が少くない様であるが、それは誤つたる申分であるので、大凡八九才から感ずるが、それより後は六十才であらうとも、七十才であらうとも、白痴とか、又は觀念が亂

るるとかいふやうなことの無い上は、必ず感ずる。中には之を業とする人で、二才の小供でも、三才でも、四才でも、五才でも、よく感ずると話す人があるが、それは信ずることはできない。術者その人を信ずるだけの精神が出来上つて居るでなくては、無効のものである。或は四才や五才の小供に病氣を平癒せしめたことがあるかも知れぬが、それは偶然のものといふの外はない。術者と被術者との兩方の心理状態によつて、効を奏するのであるのに、被術者が何も知らぬ乳兒や、四歳や五歳の子供であつて、有効なる筈はない。八九歳となれば、いくらか精神が出来上つて居るからよい。なれども、八歳で感ずるといふ人よりも、九歳位で感ずるのが多い。だが、諸君が實驗をせらるるならば、十三歳以下の子には、施さないのがよいと、私は信ずる。寢小便の癖があるとか、その他の悪癖があるとか、又は病氣であるとかいふのならば、速に暗示を與へて、或は矯正せしめ、或は治せしむる必要がある。さういふ目的

でやるのは、決して差支はないが、諸君が研究材料として、みだりに用ふるやうなことは、無い様にせねばならぬ。十四歳以上はよいが就中、十六七歳頃より、二十歳頃までが、被術者として、極めて適當なのである。術者の側から申しても、都合がよければ、また被術者その人の上からいひても、都合がよいのである。どういふ譯で、雙方とも都合がよいのであるか、そのことに就て、今これから、話をする。又何が故に、十三歳以下はよくないのであるか、そのことに就ても、述べねばならぬのである。

(大人と研究心) 大人に就て行つてもよいのであるが、初めの間は、それが都合のあしきことが少くないのである。必ず都合があしきと申すのではないが、動もすると、大人は初めから研究せんとする心を有したり、ヒヤカシ半分で、術者を困らせんとする様なのが、ないではない。よく熟達するならば、その人の顔を見て、直ぐと分るのであるが、熟達せ

ない間は、さうはゆかぬ。大人そのものが感じ難いのでない、よくその心を静めて、術者を信用するならば、必ず能く感ずるので、また、さうなくてはならぬのである。だが、實驗されんとするに當りて、研究せんとするならば、心が二つに分れて、注意ができない。研究するは、大によろしいのであるが、自分が實驗さるゝに際して、この心理作用は、どういふ譯であらうかなどこのことを考へてはよくない。術者が能く熟達して居ると、被術者がよく注意し得る人であるか否かも、知ることができるのであるが、また今一つには、術者が確信力あるために、初めは術者を試みるやうな心で出て来た人でも、遂には眞面目になることがあるのであるが、諸君が、これから初め出さんとせらるゝには、さうは行かない。

(最も適切なる年齢) 研究には、十四歳以上、二十五歳頃までがよい。就中、十六歳頃より二十歳頃までが、最もよいのである。何となればこ

の年頃は、よく人を信じて、大人が有する如き研究とか、又はヒヤカスなごのことが、比較少い、そして又、その年齢以下の者に比すれば、その性質にいくらか骨もあつて、行ふ上に都合がよいからである。之は術者側の都合のよいのであるが、被術者その人として、どういふ所が、都合がよいかといふに、今申した年齢は、内外の習慣を養成するに、好時期である。之は教育家たる人に於ては、心得て置いて貫はねばならぬことである。内外の習慣といふのは、人品修養の基をつくることや、他人を尊敬することや、言語を慎むことや、能く勤勉することや、それらをついであつて、よく注意を傾けるといふのも、内的習慣の一である。そしてこの心理実験は、注意に基くものであるから、この時期に於て、その実験をせらるゝに於ては、注意をまとめ易くなる。記憶力が、あまり良くない人でも、この実験の爲に、知らず識らずの間に、記憶力が強くあつて居るのが、少くない。これはよく注意する習慣が養はれて居るか

らのことである。注意と記憶との離れ、からざることは、教育家たる人に於ては、御承知のことである。

(誠實の必要) 此術の実験であることも、濫用するやうなことは、甚だ不可である。之は何事なりとも然りであるが、被術者をオヒチャにせんとする様な心で行つてはならぬ。さういふ心で行ふならば、術者自ら自己を信ずることはできない、自ら信ずることを得ずして、他人を信せしめんとするは、これ不可能のことである。諸君が、実験をなさるとしては、真面目誠意を以て行ふでなくてはならぬ。

(忘れてはならぬ第二の暗示) それから十三歳以下は、何故に、研究の材料として、たび／＼行つてよくないかといふに、その頃は、意志が未だ能く確實になつて居らぬのである。十四歳以上になると、不充分ながらも、意志が、いくらか確かになつて居るが、十三歳以下であると、そうはゆかぬ。そこでどういふことになるかといふに、意志が確實でないこと、

不誠實なる人の暗示に感ずる様なことが、ないとも限らない。滅多にさういふことはないが、萬に一のことをも憂へて、謹慎に謹慎を重ねて行ふでなくてはならぬ、萬に一の場合なりとも、よく心を用ふるでなくてはならぬ。他の不誠實なる人の暗示に感せしめない様に、心を用ふることがなくてはならぬ。それには、どうするかといふに、被術者に向つて、「汝は今此の如く感ずるが、萬一この私にても、不誠實の心で行はんとする様な場合、又はあなたが承知せざる場合、又は不必要なる場合に於ては、決して、あなたは感ずるものではない。又他人で不誠實なる人が、あなたに行はんとしても、決して感ずるものではない。それは、たしかである。あなたが、その人が誠實であるか、不誠實であるかを知らなうとしても、先方の方が不誠實なるならば、決して感ぜないことになる。確に左様である。」といふ暗示を興ふるを忘れてはならぬ。ところが、十三歳以下であると、意志が未だ十分に發達せないがために、斯く

いひ聞かせて置いても、此方の暗示には感ぜずして、不誠實なる者の暗示に感ずる如き場合が、時に無きにあらずである。それ故、たびく行はないのがよいといふのである。十四歳以上になると、意志は不完全ながらも、いくらか發達して居るから、斯様なることは、決してない。十三歳以下の者でも、悪癖や病氣は、直して置かねばならぬ、さういふには、行つてよいが、たびくは爲さないといふことに定めたい。
(濫りに行ふべからず) また十四歳以上の者に對しても、前にも述べたる如く、オモチャ半分のみだりにせない事に心を用ひられたいので、小學校の先生にして、その児童に、むやみに施す、それも眼に物を見せたり、頭を壓したりする方法で、むやみに行ひ、そして今私が述べた如き暗示も何も興へないのが多かつたが、これはよくない。主人が女中に催眠術を施す、それがたびくであるために、遂に女中は、主人の顔を見ると、直ぐ眠る、學校の先生が、児童や生徒に、たびく行ふ、それが

ために、その児童生徒は、その先生の顔を見ると、直ぐ眠るといふのが、よくあるが、かゝるのは、みだりに行ふものといふべきで、たとひ主人たりとも、女中に對して濫りに爲すべからずである。況して學校教師として、児童生徒に對して、濫りに行ふべからざるはいふまでもないことである。これは今述べたる如く、不必要なる時には感ぜないとの暗示を與へないのである。

(不誠實と不成功) 今私は不誠實なる者の暗示に感ぜしめない様なる暗示を、被術者に與ふることを忘れてはならぬと述べた。これは如何なる場合に於ても、必ず與へねばならぬ。だが、不誠實でやる者が、能く此術を行ひ得るかといふに、どうしてよくはできるものではない。それは何故であるかといふに、今も述べたる如く、かくては、自らよく信ずるを得ず、自ら信ずる能はざるものが、他人をして信せしむるに足らないからである。嘗て、上野停車場に於て、催眠術を施して、懷中物

を取つたといふことが、新聞に出て居つたが、さういふことは、できるものでない。確信がありて、出来るのであるのに、停車場などで、人が見て居りはせぬかなど、思ひながら、できるものではない。上野の件は眠つて居る人の懷中物を取つたのであると、私は思ふ。それを催眠術であるとして、催眠術の害を述べ立ててくれれば、大に迷惑する。さういふことのできるものでない。停車場などで、できるでないが、然かし、その他の場所でも濫用する様な事があつてはよくない。人の物を取るなどは、言語同斷であるが、それ程でなくとも、オモチャにするなどのことは、上達するものでなく、又一時上達したのも、退歩することになるのである。凡て誠實とするならば、成功するが、不誠實の心では、成功し難いのである。

(眞言宗秘密の棒縛) 眞言宗に秘密の棒縛といふのがある、棒縛のみではないが、たゞその一例として、棒縛といふことを申すのである。之

は繩を用ひずして縛るので、私共が行ふ實驗と、同じである。ところが、高德の僧にして之を行ふことができるとしてあるのは、當を得たることで、要するに、これ、人格暗示をいへるものに、外ならぬのである。然るに、その僧にして、不了見を有するとか、不品行となるとかするとか、佛の罰で、行ふことができない様になるとしてある。これは即ち、不良なる心のために信念がなくなるからである。諸君にしても、その通りで、誠實にて行ふならば、ますます熟達するのであるが、不熟達であるならば、一旦熟達したるものも、退歩し、遂には行ふを得ざるに至るのである。これは、諸君にしても、他の人にしても、同じいことで、不誠實が事を成功せしむる筈はないのである。されど、一時たりとも、不誠實者のためにオモチヤにされる様なことは、よくないから、被術者に對しては、不誠實者の暗示に感ぜないといふ暗示を興ふるのである。此暗示を興ふるを忘れてならぬ。

第六章 心理實驗

(教育家等の爲に實驗を行ふを辭せず) 本章に説くのは、從來の言葉では、催眠中の現象といふべきである。私の著書最新式催眠術などにも其語を用ひたが、併し、此頃私は、心理實驗と稱するのである。勿論此方が正しいのである。さて如何なる實驗ができるか、私は、教育家たる人、父母たる人、及び醫家たる人の、参考にと思ひて、近頃各地にて實驗を行つて居るので、各所にて同一或は類似の實驗が必ず行はれるのであるが、一度たりとも實驗を見た事のない人は、左様なことが行はれるものであらうかなどと、疑念を有せらるゝことが無いともいへぬ。故にそれ〴〵實驗を行ひたる場所を記して置く。その場所に限つて行はれたではないが、行ひたる場所の一を記するならば、若しも疑はしく思はるるならば、其場所に聞合せられても分ることである。又實地見たいとの

希望があつて、學校又は教育會又はその他の團體等より要求せらるゝならば、出來得る限り都合して行く本意である。一人たりとも、此心理實驗を知らるゝならば、教育上大に益あることゝ信ずるを以て、其要求に應ずることゝする。なれども、日を定めて、必ず此日にといはれては、應じ難いことが無いとはいはれぬ。否、應じ難いことが多い。何となれば、私も教育家の一人、自分が關係せる學校の都合もあるからである。なれども、日曜その他に休日に限りはせぬ、大凡此月の間とか、又は來週の中にとかいふ様にして要求あることにしたい。さすれば、十中八九迄は、應じ得るのである。

(一) 心に思ふことが外部に現はるゝ實驗

(第一、手の開き上る實驗) 實驗希望者數名を前席に列せしめ、其一名の訓導を招きて、兩手を前に出さしめ、「其手は開く」との言語暗示を與へたるに、直に手は開く。程なくして、「其手は上る」との聲をかけたる

に、いはるゝまゝに、手は上り、次で「その手は頭上に落つる」との言語暗示を與ふると、手はいはるゝ通り、上に落つ。(千葉縣君津郡巖根小學校にて)

(第二、自己の性質を文字にて現はす實驗) 二十二三歳の男子を、黒板の前に立たせ、眼を閉させ、「汝は自己の性質をのみ思ふべし、他を思ふべからず、汝は正直なるや、正直ならざるや、嘘をいふや、否や、そのみを思ふべし」と命じ、而して後、右手にチョークを持たせたるに、本人の手動きて、「少しは嘘をいふ」と書す、後に本人に、知りて書したるか、知らずに書したるかを聞きしに、書きたることは知らずと言ひ、何人が書したるかを問ふ。汝自ら書したりといはれて、大に驚く。(千葉縣多古町小學校にて)

(第三、心に思ふことを文字に現はす實驗) 十六七歳の女子を黒板の前に立たせ、眼を閉させ、「汝は忠君愛國といふことに心を専らとし、他

を思ふべからず」との言語暗示を與へて、チョークを持たせたるに、其手動きて、忠君愛國の文字現はる。後、本人に聞くに、自ら書したるを知らずといふ。(麴町高等女學校にて)

(第四、心に思ふことを言葉に發する實驗) 二十二歳の學生を、注意三昧状態に導き、而して後、汝が現に心に強く思ひ居る事あらば、必ずそれを口にて發するに至るべし」との言語暗示を與へたるに、「寫眞がまづくて不快だ」といふ。後、本人に聞くに、知人に送らんとしてとりたる寫眞が、非常にまづき故、不足に思ひ居つたといひて、その寫眞をポツケツトより出して見せる。然らば、「汝は寫眞がまづくて不快と口にしたるを知るか」と問ふに、知らずと答ふ。(東京外國語學校にて)

(觀念と運動との關係) 第一實驗は觀念と運動との關係を示す實驗である。觀念と運動とは相伴ふべきものである。即ち一の觀念を浮ぶるときは、身體は其如くに運動するものである。天といふ觀念と共に、眼は

上を向き、丸といふ觀念と共に、其手は丸を形作らんとする。天なる觀念を有しながら、眼が下を向いたり、丸と思ひながら、手が四角を形作るが如き場合は、それは例外と見ねばならぬ。第二章に於て注意のまごまりを知るといひたるも、ツマリそれと同一で、注意が一の觀念に専らであれば、それに伴ふ身體の運動も、著しくなるが、未だ能く確實なる觀念とならざる間は、身體の運動も著しくない。觀念と運動といふことを、言葉を換へて、何人にも知り易くいふならば、心に思ふことが、身體外部に現はるのである。

(徳義の必要) 此第一實驗によりて、吾人は徳義の必要なるを知らねばならぬ、即ち内心に徳ある人の行爲は、自然と、その徳に伴ふに至るべきも、内心徳なき人が、徳あるが如く装はんとしても、永遠に装ひ得るものでない。第二實驗によりて、一層それが明かとなるのである。自ら眼を閉ぢてチョークを持たされたを知らないが、心に思ふ通りに手

が動きて、文字となる。此實驗に於て、内心と相違せる文字は、決して現はれないものである。正直なる人であるならば、必ず正直との文字が出るが、然らざるならば、正直にあらずとか、不正直とかの文字が出る、嘘をいはない人であれば、「嘘はいはず」と書するが、嘘をいふ人で、「嘘をいはず」と書す様な事は、決して無い。第三實驗も、第二實驗と敢て異なることはない。自己の性質を思はしむる代りに、術者の方より忠君愛國といふ觀念を興へて、そのみに心を専らにせしめたがために、それが遂に文字となりて現はるゝのである。第四實驗では、手で現はせる代りに、口でいはせたとに過ぎないので、いづれにしても、心に思ふことが外部に現はるゝ實驗である。そしてこれは實驗の際のみでなく、平日に於ても、心に思ふことが、必ず外部に現はれなくてはならぬのである。

(二) 教育上の感化を知る實驗

(第五、文字の巧拙を支配する實驗) 三學年の女生徒に、自己の姓名を

書せしめ、「後更に、今回は巧に書くを得ず、手はふるひて字は長くなる」といひたるに、果して手はふるひて、長き字となる。次に「平日よりも巧に書するを得べし」との言語暗示を興へたるに、第一回に書したるよりも、巧に書するを得たり。(東京高等女學校にて)

(第六、歩行を止むる實驗) 三十歳の男子を呼び、「汝の足は、床に着して、歩むを得ず」との言語暗示を興へたるに、歩まんとしても、少しも足は動かす、次に「右の足のみ歩むを得るも、左の手は、棒の如くなりて動かす」といひたるに、又其如くなる。後「兩足共、容易に歩むを得べし」との暗示を興へたるに、容易に歩むを得たり。(静岡縣磐田郡見附町報徳社にて)

(第七、立をつ得ざらしむる實驗) 十六七歳の男子に向ひて、「汝の膝は、床に着して、立つを得ず」といひたるに、全く膝は床に着し、立たんとしても、立つこと能はず。次に「手を床につけて立ちなさい、さすれば

膝は床を離れる。されど、其手は床に附着して取れず」といひたるに、其いはるる如く、膝は床より離れたるも、兩の手は、床に附着し、力一杯に取り離さんとするも、少しも床上を離れず。(群馬縣太田郡世良田小学校にて)

(第八、帽子が離れない實驗) 三十歳許の男子に中折れ帽子をかぶらせて、「其帽子は、頭より離れず、取去ることを得ず」との言語暗示を與へたるに、兩手にて取去らんとしても、取るを得ず。「今は取去るを得べし」といはれて、忽ち取去るを得。「併し、汝は其帽子を投げんとしても手より帽子は離れず」といはれて、其帽子を投げんとしても、指はかたくそれを握りて投ぐるを得ず。(群馬縣立館林農學校にて)

(第九、ハンカチーフを重く感ぜしむる實驗) 二十七八歳の男子を招き、床止にハンカチーフを置き、「これは重くて、汝は持上げるを得ず」といひたるに、兩の手にて、ハンカチーフを持上げんとしても、少しも

あがらず、「容易に持上ぐるを得べし」といはれた時、軽く持上ぐるを得たり。(愛知縣南設樂郡作手村農學校にて)

(第十、眼を開かせない實驗) 一人の生徒を呼び、自ら眼を閉さしめ、而して「その眼は開かず」との言語暗示を與へたるに、眼を開かんとするも、開くを得ず、「開くを得べし」といはれて、容易に開くを得たり。

(新潟縣直江津農商學校にて)

(第十一、音聲を支配する實驗) 一青年をして、先づ大聲をあげて、オイーと言はしめ、後「汝は今オイーと言はんとしても、聲は出でず」との言語暗示を與へたるに、青年は聲を發せんとするに、口は開くも、聲は少しも出でず。「聲は出る」との暗示を與ふるに、容易に聲を發するを得たり。(新潟縣刈羽郡立農學校にて)

(第十二、起つを得ざらしむる實驗) 一訓導を呼びて、床上に臥せしめ、直に「汝は起つを得ず」との暗示を與ふるに、訓導はつとめて起たん

とするも、起つを得ず、「起つを得べし」と暗示を與ふると共に、直に起つ。(茨城縣久慈郡宮川村尋常高等小學校にて)

(善良なる暗示と不良なる暗示) 第五實驗より第十二實驗にいたる迄は、いづれも、これ教育上の感化を知り得る實驗であつて、爲し能ふことの暗示を與ふれば、必ず爲し得るも、爲し能はずとの暗示を與ふれば爲し能はざるに至るを知るので、家庭及び學校に於ても、子女及び兒童生徒に對して、凡ての方面に於て、爲し能ふとの暗示を與ふる様に、父母及び教育家は、心を用ふるでなくてはならぬ。少し子供に缺點でもあると「お前の様な者は、仕方がないね、そんなことでは、立派な人にはなれないよ」などと、常にいひ聞かせる母親があつたり、一度中學でも落第すると、「貴様の如き奴は、到底立身出世の見込はない、學校は止めるがよい」などといふ父親があつたりするが、そんなにいはるゝと、遂には其暗示の爲に、立派なる人と成り難いのである。それで「汝は駄目だ」な

どの言葉は、家庭に於ても、學校に於ても、用ひてはならぬ。常に駄目駄目といはるゝ人は、それが爲に、遂には駄目となり易いものであるが「人の爲すことは、汝も爲さざるを得ず、汝は必ず爲し得る」との言語暗示を常に與ふるときは、ために、爲し得る人と成り易いのである。この呼吸が、教育上頗る大切なのである。

三 飲食變味の實驗

(第十三、水を湯と感せしむる實驗) 十七八歳の生徒に、コップに一杯の水を與へて、「之は湯なり」といひたるに、其如くに感じ、「砂糖入れり」といひたるに、甘いと答ふ。(静岡縣立農學校にて)

(第十四、菓子を鹹く感せしむる實驗) 十六七歳の生徒に、菓子を與へて、「鹹い」との言語暗示を與へたるに、其如くに感じ、口に入れたる菓子をはき出す。(長野縣更級郡立農學校にて)

(家庭と飲食物) 水なりとも湯と感じ、砂糖の入らないに甘く感ず

る。又甘い菓子であるのに、鹹く感ずる。これらの實驗により、如何なることを心得ねばならぬかといふに、父兄が食事に小言をいふと、子供もまた、其の食を美味ならざる様に感ずるが、父兄等が喜んで食するものは、子供も其味を良く感じ、喜んで食するといふことを、此二の實驗によりて知られたい。それは何人でも知りぬいて居ることを述べるに過ぎないのだが、家庭によりては、随分と心得違をして居るのが無いではない。夕食などの菜が氣に入らぬとて、「こんなものが、たべられるか」など、其妻に小言をいふ人があるといふことだが、それを見て居る子供は、其食を美味と感ぜないことに成り易い。また、いつでも宴會だとか、何とかいつて、外で食事をすることが多くて、自分の宅では、あまり食事をせないやうな父親を有する子供は、遂に家での食事は、美味でない様に感ずるに至り易いのである。そしてこの様になると、其好まざる食は、あまりよく身體のためにならぬのである。父母ともに、よろこ

び食する物は、子供達も喜んで喰べ、従つて消化もよくなるのである。だが、喜ぶにあらずして、嫌や／＼ながら食するものは、消化し難く、消化し難いものは、身體の滋養にもならぬのである。たとへ、それだけ滋養分をふくみたるものでも、いや／＼ながら食するときには、よく消化し難くて、身體の滋養にもならぬのである。之は現に醫界の識者も口にせる所である。滋養分のあるものを日々食し居る人が幸福なるに「あらずして、ごんなものを食べても、よく消化し得る人が、ほんとに身體のためになつて、それが即ち食事に關する幸福である。ごんなものを食してもとはいふが、豚が食ふ様なものを食べて居れといふのではない、人の用ふる食の中で、滋養分だとか、何とかいひて、吟味に吟味を重ねたとしても、よろこばずして食しては、何にもならぬ。だから、喜んで食する様に、子供を仕向けるでなくてはならぬ。

(食慾をすゝめしむるに應用) 此飲食の變味といふことは、酒や煙草

を止めさせるのに應用することもできれば、大病後などで、食慾のすままないのを、すまめさせる様にすることもできるのである。即ちこれまでに好んで飲みたる酒でも、味が悪いとの暗示を與へて、好ましめざる様にし、又食慾のすままない人には、味がよいといふ暗示を與へて美味と感せしむるのである。酒煙草を止めしむる事は、後に再び述べる。

四 鼻、眼に關する實驗

(第十五、香水なくして其匂ひを感せしむる實驗) 二十歳ばかりの男子を椅子にかけさせて、「汝の指には、良い香水が匂ふ」といひたるに、被術者は自分の指を鼻にもちゆきて嗅ぎ、「良い香水である」と言ふ。次に「今一つの指には、アンモニヤの臭氣がある」と言ひたるに、被術者はまた其如くに感ず。(茨城縣那珂郡菅谷農學校にて)

(嗅覺の利用) 嗅覺の變化も、食物の味をよくし、又は之をあしく感せしむる爲の助けとなるのである。味のみならず、其匂ひがよければ、

食慾もすまむ譯である、味をまづく感せしむると同時に、あしき臭氣を感せしむるによりて、これまで好みたる酒などを吞ましめざることになるのである。煙草を止めしむるが如きは、主としてあしき臭氣を感せしむるのである。

(第十六、活動寫真と、淺草觀世音を見る實驗) 一生徒を椅子に腰かけしめ、眼を閉させて「汝の眼には大瀑布の活動寫真が見ゆる」との言語暗示を與へたるに、其如くに感じ、手をたきて喜ぶ。次に「向ふに赤き大なる堂が見ゆる」との言語暗示を與へたるに、「見ゆる」と答ふ。「あれは東京淺草の觀世音の堂なれば、合掌して拜すべし」といひたるに、合掌して拜す。(新潟縣古志郡上組農學校にて)

(第十七、被術者以外の人が活動を見たる實驗) 一學生に眼を閉させて、「競馬の活動寫真が見える、見えたれば、汝は手をた」といひたるに、被術者以外の一學生が、手をたきて、「見ゆる」と叫び、次で

被術者も見ゆる」と叫ぶ。(東京外國語學校にて)

(第十八、室内を河流と感せしむる實驗) 一青年に眼を開かせて、一の水さしを見詰めさせ、「一より十まで數をかぞへる毎に、此水さしは、大きくなり、十と呼ぶと共に、此室の天井までとゞく程の大ききとなり、かく大となりたる後に、手を、たけば、水さしより水あふれ出で、此室内は大河と變ず」との言語暗示を與へ、而して後、術者は、一より十までかぞへたるに、被術者は手にて次第に大きく成る様子を示し、眼を上に向ける、十の數を呼びたる後、術者手をたゞきたるに、被術者は、衣服をひきあげて、恰ど水中を歩む如き様子を爲す、これ全く河流と感じたるなり。「魚流れ來るを以て捕へよ」との言語暗示を與へたるに、魚を捕ふる様子を爲す。これまた眞に魚ありと感じたるなり。(下野國足尾銅山俱樂部にて)

(第十九、教場を平原と感せしむる實驗) 一生徒をして、眼を閉さし

め、「汝今、眼を開けば、此教場は平原と變じ、多くの人々は杉の木となりと見ゆる」との言語暗示を與へたるに、被術者は眼を開きて、驚きたる様子にて「野原だ」といふ。席上の人々聲を發したるに、「杉の木が物をいふ」といひて、不思議に感ず。(長野縣埴科郡屋代農蠶學校にて)

(第二十、盆を生魚と感せしむる實驗) 被術者の前に、一の盆を置きて、「これは生きたる魚なり」との言語暗示を與へたるに、被術者は其如くに感じ、盆を持ちて急ぎ歸らんとする。後術者は、「魚にあらず」といひたるに、被術者は「盆であつた」といひて、その盆を投げ出す。(長野縣埴科郡坂城町農蠶學校にて)

(眼と精神) 第十六實驗より第二十實驗にいたるまでは、これ眼の感覺に關する實驗である。之は眼を閉させても、いはれたる暗示通りのものを見るが、よく注意のままとまりたる被術者であるならば、眼を開いたるまゝで、暗示通りのものを見るのである。これらの實驗によりて、眼

は精神に支配されて居ることを知り得るのである、外界の物を見るは、何によるかといふと、「眼があるから見るのだ」と答へる人が多いが、それは浅い考である。眼なりとも、精神作用が、それに働かなくてはならぬ。上に記したる諸實驗によりて、その道理が明瞭となるのである。お釋迦様の弟子の、何とかいふ人が、眼がつぶれた。すると、お釋迦様は、其弟子に向つて、「汝には、精神上の眼を興へてやる」といはれたが、それがために、其弟子は、肉眼は働かないが、精神上能く周圍の事物を見ること、門弟中第一であつたといふことである。多くの人は、かゝることがあるものかといひて、疑ふのであるが、今述べたる諸實驗によりて、其事實なるを察するに足るのである。

(眼の感覺と散鬱) 眼の感覺の實驗は、如何なることに應用するのであるかといふに、假りに茲に、病氣等の爲に、氣が鬱して居る人があるとする。そして風景絶佳の地へつれ出せば、氣も散して、大に爲になる

も、身體疲勞の爲に、それもできないといふ様な時には、此眼の感覺の實驗によりて、風景のよい土地を見せて、そして鬱を散せしめて、快感を起さしむることを得るのである。

(記憶と眼) 今一つには、記憶力を強くするために、此眼に關する實驗を應用するのである。凡て眼より入りたることは、頭に残り易いものである。讀んだこと、聞いたことよりも、見たことは、記憶に存じ易いのである。そこで、記憶力の弱い人があつて、之を強からしめんとするには、先づ心理實驗を應用して、淺草公園なり、日光山なり、松島なり、何所なりと、見物の暗示を興へて、その見たることを記憶せしめ、それが、いくらか記憶し得るに至りたる後に於て、書を讀ませるとか、話を聞かせるとかして、それを記憶せしむる様に導くのである。

(暗示と實際の風景) 然らば、實驗中に於て、暗示を興ふれば、その土地の風景其儘を見得るや否やとの疑問が、諸君に於て起るであらう。淺

草觀世音といへば、實際の淺草觀世音と同じいものを見得るであらうかとの質問が、したくなるに相違あるまい。其質問は無理からぬことである。某催眠術者の著書に、「術者が松島が見えるといへば、如何なる時も、被術者は實際の松島其儘の風景を見る」と書いてあるが、そんなことはない。口でただいひたるのみで、眞の風景を見るなどは、それは嘘である。時には實際に近いものを見ることもできるが、如何なる時も然りとはいはれない。人には感通といふ精神上の作用がある。甲なる人が思ひ居ることは、之を口にせずとも、乙なる人に感通して、それを知り得るのである。此感通といふことは、種々の實驗によりて知り得るので後に述べるのである。そこで術者が心に強く淺草觀世音のことを思ふならば、それが被術者に感通して、實際の淺草觀世音に近いものを見る。又本人が嘗て淺草觀世音を見たものならば、術者の暗示によりて、記憶を呼び起して、記憶して居るだけのものを、眼にて見る。だが、術者

も見ただことなく、被術者も見ただことなく、又感通作用がよく行はれないときは、よい加減なものを、被術者が、想像で見えて居るので、實際の通りを見ることはない。そしてかゝる場合が寧ろ多いのである。

(五) 耳に關する實驗

(第廿一、音樂を聽かせる實驗) 一訓導をして、眼を閉ぢてを心静めしめ、二三の實驗を試みたる後、「音樂がきこえる」との言語暗示を與へたるに、「たしかにきこえる」と答ふ。後「その音樂につれて手足がうかれ出る」といひたるに、手足の調子をそろへて、歩み出す。(埼玉縣南埼玉郡岩槻小學校にて)

(第廿二、椅子が音聲を發すると感せしむる實驗) 一青年をして、眼を閉ぢて心を静めしめ、二三の實驗を行ひたる後、「汝今眼を開けば、汝の側なる椅子は、汝の名を呼ぶ」との暗示を與へたるに、被術者は眼を開きて、「椅子が名を呼ぶ、不思議だ」といふ。(香川縣綾歌農業學校にて)

(第廿三、呼鈴を太鼓の音と感せしむる實驗) 一學生をして、眼を開かせたるまゝ立たせ、「太鼓の音がする」との言語暗示を與へつゝ、呼鈴を鳴らしたるに、被術者は太鼓の高音を聞きたりといふ。(東京帝國大學農科大學にて)

(第廿四、數間離れて懷中時計の音を聞かしむる實驗) 一學生をして、眼を閉ぢて直立せしめ、「汝の耳は懷中時計の音を、數間離れて聞くを得」との暗示を與へ、他の一學生をして、懷中時計を、被術者の耳より次第に遠ざけしめたるに、最初日には一間離れて聞くを得、數日實驗を重ねたる後更に實驗したるに、四間離れて聞くを得たり。(東京外國語學校にて、本書口繪參照)

(第廿五、大聲をも耳にせしめざる實驗) 一學生をして、眼を閉ざしめ、列席の數十名の學生に、大聲を發せしめて「今は何等の聲音もなし」との暗示を與へたるに、被術者は、少しもその大聲を聞かざりしと

いふ。(私立東京農業大學にて)

(耳に關する實驗の應用) 音樂が聞えるなどの實驗によりて、心を慰めしむるを得るのである、眼の實驗にて風景絶佳の地を見せて、氣を散し心を樂ましめ得るが如くに、音樂などを聞かせて心を慰ましめ得るのである。又或一種の音響に驚き、又は恐るゝ人があるならば、第廿三實驗の如くに、その音響を變化して聞かしめ、以てその驚きその恐れを去らしむることを得るのである。此頃の子供で、鐵砲や大砲の轟きに驚いたり恐れたりする者は、多くは居らないが、併し、稀にある。斯る者に對しては、鐵砲や大砲の音を、太鼓なり何なりと、本人が喜ぶ音に變じて聞かしむるのである。鐵砲は恐るるに足らず、大砲の音は驚くべきものならずと教訓しても、尙その驚きその恐れを去らざる者には、此實驗を應用するのである。實驗當時のみならず、後に於ても、その音を變じて聞かしむるを得るのである。これは後に説く殘續暗示によりて斯く

音を變じて聞かしむるのである。かくして變音を聞かしむると共に、鐵砲や大砲の音の恐るゝに足らざることをいひ聞かせ、遂にそのまゝの音を耳にしても、恐れず驚かざるに至らしむるのである。

又數間離れて懷中時計の音を聞かしむる實驗は、數年前に東京外國語學校にて行ひ、その後類似の實驗を行ふべき機會を得ない。これは一回のみならず、二三日をへだて、たび／＼行ひ、遂に四間を離れて聞くを得るに至つた。口繪は神田の工藤寫眞館にて撮影したもので、場所が狭い爲に、漸く一間半位の距離であるが、此時は既に四間にて聞くを得たのである。かゝる實驗によりて、耳の遠い人を近くせしむるを得るのである。鼓膜が破れたるものは治し難いが、然らずして耳の遠いのが少くない。それらは心理治療によりて、耳を近くすることは難くはない、其經驗は、自分にはいくらかもある。ごれだけ暗示を與へても効のないのも少くなかつたが、それはたいていは、鼓膜が破れて居るのであつ

た。「鼓膜が破れて居つても耳を近くすることはできる」といふ人もあるが、自分の經驗では、そうは思はれない。然かし、精神上耳の遠いのが随分多い。そして、本人でも、醫士でも、その精神のためであることに氣のついて居らぬのがある。そういふのは、心理應用にて治することは難くない。自分の經驗の一例をいへば、秋田縣荒川鑛山役員の令弟で、十七八歳の青年が、よほど耳が遠かつたが、心理應用で五分間にて近くなつた。これは全く精神上遠くなつて居つたものである。併し、精神上遠くなれるものは何人なりとも、かく容易に治するかといふに、さうはゆかない、數日又は數ヶ月を要するものである。

又第廿五實驗によりて、耳が鳴るのを静めさせ得るといふことを證據立てるのである。いつも耳鳴がして困るといふ人がある。さういふのは、比較的容易に治せしめ得るものである。

(六) 皮膚筋肉に關する實驗

(第廿六、身體振動の實驗) 一青年を椅子に腰かけしめ、「汝は汽車に乗りたり、身體は左右に振動す」との言語暗示を與へたるに、身體忽ち左右に振動す。(島根縣松江高等女學校にて)

(第廿七、寒暑を感せしむる實驗) 一青年に「汝は寒く感ずる」との暗示を與へたるに、その如く感じ、後更に「あついく」といひたるに、又その如く感ず。(新潟縣栃尾實業學校にて)

(第廿八、針を刺して痛く感せしめざる實驗) 此實驗は、自分は公開席上にては、殆んど行はないことにして居る。何となれば、見た眼に不快の念を思ふる場合が多いからである。ただ必要に際して行ふのみである。手なり、その他身體の各部に針を刺しながら、「痛く無い」との暗示を與ふれば、被術者は何等の痛みをも感せざるのである。公開席上にて直ぐ之を行ふ人が少くないが、自分は同意することはできない。如何なる場合に此實驗の必要があるかは、直ぐ後に述ぶるとする。

(第廿九、手を觸れたるのみにて痛く感せしむる實驗) 之は第廿八實驗の反對で、勿論之も特に必要な場合の外は、公開席上などに於て行はないがよいと信ずる。單に軽く手を觸れたるのみにて「痛い」との暗示を與ふれば、被術者は痛く感ずるのである。

(第三十、水に手を入れて湯と感せしむる實驗) 前に飲食變味の實驗の中に、水を湯と感せしむることを述べたが、口のみでなく、手なり、その他身體いづれの部分なりとも、水をあつく感せしむることが出来る。その反對に、湯を水と感せしむることもできる。大昔、武内宿禰が、熱湯に手を入れて、手がただれなかつたといふのは、即ちこれである。心理實驗の上からいへば、歴史上の彼の一件は、事實と見得るのである。中には、火に手を入れさせて、あつく感せしめない實驗を見せる人がある。が、その熱湯及び火の實驗も、自分は公開席上では行はないことにして居る。餘計な眞似などをする人があるといけないから。

(第卅一、同形カードの一枚くゝを感識する實驗) 一學生をして、眼を閉ざしめ、同形同大のカード十枚を出し、一枚づゝ之を被術者に與へて、その四面に手を觸れしめ、かくして十枚を與へ終り、更にその十枚を同時に與へ、再び四面に手を觸れしめて、最初の順序にて列せしめたるに、初め五回は失敗せるも、六回目にて於て全く成功したり。(私立東京農業大學にて)

(第卅二、名刺の文字を指頭にて感識する實驗) 一學生をして、眼を閉ざしめ、各人の名刺を與へ、指頭にて、その活字を感識せしめたるに、數回の實驗後、五枚中の二枚を感識するを得たり。(東京外國語學校にて)

(第卅三、白紙上の文字を指頭にて感識する實驗) 白紙に筆にて大小さまざまの文字を書し、被術者をして、眼を閉ぢ、指頭にてその文字に觸れしめたるに、容易に感識するを得たり。此實驗は、第卅二實驗に比して頗る容易である。(東京帝國大學農科大學にて)

(これらの實驗の應用) 第廿六實驗は、何時如何なる場合にも、直ぐに行ふことのできるもので、實驗といふ中に加へるほどの價值のないものである。そして之を應用するといふことの必要もあまりないが、併し、暗示によりて身體を振動せしめ得る故、それを反對に、暗示により、振動する身體を矯正する事ができるものである。病後又は老年の爲に、身體全部の振動する人がある、又手とか顔面とかの一部が振動する人がある。それらも「振動せない」といふ暗示によりて、矯正せしむることが出来る。第廿七實驗により、熱度高き病人の熱を低くからしめ、又貧血性の人を治させ得ることを知り得るのである。「さむい」の暗示に能く感ずる人ならば、たいていは熱をさげることが出来る。「あつい」の暗示に感ずる人ならば、たいていは貧血を治し得るのである。第廿八實驗之は公開席上で行はないといひながら、今此書上で述ぶるのはどういふのかと思ふ人があるであらう。見ては不快だから見せないが、これも

また益用し得る場合があるから、講話又は書物の上では、述ぶるのである。之は外科手術の際に、クロロホルムを用ふる代に、應用するのである。患部切開などは、少しも痛感を起さしめずして、手術を施すを得るのである。併し之は人によるので、此暗示に感ずる人と感ぜない人があるから、何人の手術にも應用といふ譯にはゆかない。又此實驗は生理上の法則に反するが如くに思はるゝが、實は生理を精神によりて助けることを證據立てるので、反證でない。即ち小刀や針の感位は、精神にて左右し、支配し得るを知るのである。針で指などをついて、大層心配する人があるが、さういふ人は、必ずその指がはれあがりたり、痛みが強くなつたりするが、さう心配をせない人は、はれあがることもなく強く痛みを感ずるにもあらずして、いつの間にか、治するのである。その道理を、此實驗にて知るを得るのである。さればとて、刀を腹につき立て、これだけ「いたくない」との暗示を與へたところで、用を爲さ

ない。ただ或範圍内だけは、生理上の方面を精神にて支配し得るといふことを知るのである。第二十九の手を觸れたるのみにて痛く感ずる様な實驗は、さういふ所に用を爲すかといふに、それは盜癖などを矯めるに應用する事ができる。盜癖を矯めるには、いろくなる方法があるが、その内の一として、手を觸るべからざる物に手を觸れたならば、強く痛く感ずるとの暗示を與へて置くのである。然る時は、何時如何なる場合に於ても、盜まんとする物品に、手を觸れると、痛くして取ることが出來ないのである。之に依りて、盜みを止むる事になる。第卅實驗も、手術又は矯癖に應用する事ができる。第卅一、第卅二、第卅三の實驗は、注意三昧の状態によりて、觸覺をかくも敏ならしめ得る事を示すのである。併し之がまた感覺の鈍なるのを治させ得る事を證據立てるのである。白紙の上に肉筆にて書したる文字を感識する位は、たいていの人は爲し得る。之は頗る容易なる事である。筋肉に關して、いつでも容易に行

はるゝ實驗が外に一つある。それは次に述ぶる第卅四の實驗である。
(第卅四、硬直状態の實驗) 一人の被術者を臥せしめて、其心を静めさせ、「汝の身體は次第に伸びてかたくなり、重量が加はる」との言語暗示を與へたるに、其言はるゝ通りに、身體はノビノビとして、かたくなる。そして肩を一の椅子に、足を他の椅子にかけたるに、腰や膝などは、少しも曲らず、一直線の如き觀を呈す。(秋田縣小坂鑛山病院にて)
(姿勢と身體) 之を硬直状態といふのである。之を其儘に直立せしむるならば胸を張り、下腹に相當に力が入りて、最も正しい姿勢である。姿勢が正しいならば、身體の筋肉にも、しまりがつくが、姿勢が正しからざれば、筋肉に弛みが生ずる。之を譬へていへば、柱のシツカリした家屋の部分は、狂ひが生じない、柱が曲れば、壁なり、其他の部分なり、凡て家屋に狂ひが生ずると同様である。この硬直状態は、本人にとりては、最も心もちがよいのである。平日に於ても、正しい姿勢の人は、心も

ちがよく、血液の循環が良くて、胸の働きがよい。殊に記憶力の如きは、姿勢のよいとあししいとによりて大なる差が生ずる。正しい人は、正しからざる人の三倍位は、腦が働くが、姿勢が正しからざるほど、腦力は疲れ易いものである。

(精神と身體) 姿勢を正しくするといふことは、人として大切であるから述べたのであるが、この硬直によりて、人の精神は自己の身體を支配することをも知るに足るのである。被術者が他の事に少しも心を傾けずして、術者の言葉のみに注意を専らとして、それを信じて居るから、身體は精神が信する通りに、かたくなるのである。されば、病は身體に宿るもの故、精神によりて病を治すことができるといふことも、この硬直状態にて知る事が難くないのである。脈博が不揃なる人に對して、脚博がだん／＼と揃つてくるといへば、それを信するならば、其いはるゝ通りに揃うてくること、かたくなるといはれて、だん／＼と硬直

となると、何等の異なる所はない。又熱が高い人であるならば、熱はだん／＼とさめるといへば、其いはれた通り、熱はさめてくる。乍去、術者の言葉を信せずして、疑念を有するに於ては、硬直ともならず、脈博も揃ひはせず、熱もさめはせないが、信すれば容易である。貧血の人でも、言語暗示にて、貧血ならざる様に爲す事ができる。心理治療は、此道理によつて効を奏するのである。二木醫學博士も、「胃病の人は、今日は昨日よりも胃の工合はよくなる、明日は今日よりもよいと信するならば、必ず治する、他の病でも同様である」といふ風に述べて居られる。之は私の研究の結果と一致して居る。「大丈夫此病は治する」と確信するならば、治するのを、さうはせないで、「今日は天候があしい、腹の工合があしくなるだらう」など思ふために、胃病の人などは、益々あしくなる。持病などいふのも、たいていは此類である。「そろ／＼冬が来たぞ、いつもの脚氣が出る」など、思ひて餘念がない爲に、遂に脚氣になる。然る

に、「本年は脚氣を出さない」と確信することにより、病を全治し、又全治といふに至らなくとも、其病を軽くするを得るのである。

(七) 精神作用感通の實驗

(第卅五、手にせるものが觀念となる實驗) 一訓導をして、眼を閉ざしめ「汝の手の感覺は無い」との暗示を與へて後、その手に二錢銅貨を握らせ、「汝は何か心に思ふよ」といひたるに、被術者は「丸い」といふ。後、「汝は銅貨を手にせるを知れるや」と問ふに、知らずと答ふ。更に鉛筆を手にせしめて、「汝の眼前に何物が見える」といひたるに、「小さい棒が見える」と答ふ。次にコップに水を入れて握らせ、「汝の耳には、何等か音が聞ゆる」といひたるに、水が流れる音がすると答ふ。後「手にせる物を知れりや」と問ふに、少しも手には感覺なしと答ふ。(秋田縣小坂鑛山本小學校にて)

(第卅六、透視の實驗) 一生徒を招き、水さしの内に小さき紙を入れて、

「この内に何があるか」と問ひしに、直に紙と答へたり。(神奈川縣高座郡鳩川農業學校にて)

(第卅七、術者が手を觸れたる菓子を感じせしむる實驗) 一生をして、眼を閉ざしめ、その前に同形の菓子數個をならべ、術者がその中の一に手を觸れ、程なくして、その手を離して被術者に向ひて、「汝は今眼を開けば、手を觸れたる菓子を知り得べし」といひて、眼を開くべく命じたるに、被術者は直に術者が手を觸れたる菓子をひらひあげたり。(滋賀縣愛知郡西押立小學校にて)

(第卅八、精神を物品に移す實驗) 一人の教育家に、「汝の精神は此椅子に移るべし。然る上は、汝の身體に觸れても、何等の感はなきも、椅子の上に手を觸るれば、汝の頭に觸れたるが如く感じ、椅子の中央に觸るれば、汝の顔面に觸れたるが如く感じ、椅子の足に觸るれば、汝の足に觸れると感ず」といひたる後、「もう精神は椅子に移りたり」の言葉をか

けて、被術者の頭及び顔に手を觸るゝも、被術者は少しも感せず、椅子の上部に手を觸るゝに、被術者は自己の頭に手をやり、椅子の足に觸れるに、被術者は自己の足に手をやる。又椅子の中央に觸れるに、被術者は自己の顔に手をやる。(茨城縣大子町農學校にて)

(第卅九、無言問答の實驗) 一學生を招きて、「汝の眼前に何物かを見得べし」といひたるに、「鳩を見る」と答へたり。その時、術者は、その腦裡に鳩を思ひ居たるなり。(東京外國語學校にて)

第卅五實驗は精神作用感通としては、適切なるものとはいはれぬが、兎も角も、本人は手に握りたるものを知らざるのに、或は觀念となり、或は視覺となり。或は聽覺となる。即ち本人が意識せざる事なりとも、感化を與ふることあるを、此實驗によりて知り得るのである。教育者は此理を承知して置かねばならぬ。第卅六より第卅九に至る實驗は、いづれも術者が思ひ居ることが、被術者に感通することを示すものである。

口に出さずとも、一人の精神作用が、他の人に感通するものである。水さしの内に紙を入れたといふ事を、術者が強く思ひ居るために、感通作用によりて、被術者は之を自己の眼前に見るのである。第卅六實驗は、水さしに穴があいて内を見得るのでなくて、その内に入れたる人が心に思ひ居るのが、感通するのである。だから、水さしを見詰めずして、後方に向いて居つても、知るを得るのである。無言問答の實驗と何等の異なるところは無い。又椅子に精神を移すといふが、椅子を用ひずして、術者が被術者の頭又はその他の部分に手を觸れるといふ事を強く思ひ居れば、それで感通するのであるが、列席の人々に知らせるために、椅子を用ふるに過ぎないのである。術者が口に發せざること故、席上の人々には、術者は何を思ひ居るか分らない故に、椅子の上部に手を觸れるを以て、被術者の頭に手を觸れると思ひ居ることを知らせるまでの事である。椅子でなくして、一人の頭に手を觸れて、他の人をし

て恰も自己の頭部に手を觸れたるが如くに感せしむることができる。口繪は即ちそれであつて、術者たる私が、一人の頭に手を觸れると、他の人が、その如く感じて、自分の頭上に手をあげて居る。之も東京外國語學校にて實驗したるので、懷中時計の音を、四間離れて聞きたると同人である。彼の千里眼も、感通の理で説明する人もあるが、之は感通のみで十分の説明は爲し難い。この千里眼の半ば以上の心理作用は知れて居る、それは拙著最新式實驗催眠術講義に記して置いたが、まだ明瞭に説明し得ざるものがある。併し、その千里眼實驗中、感通作用の行はれたる例をこゝで、述べて置く。

(第四十、千里眼の實驗) これは、今からいへば、數年前の實驗であるが、嘗て東京外國語學校にて、越後新發田までの千里眼實驗を行つた。當時の新發田中學校長渡部鐮氏(現に埼玉縣浦和中學校長)の様子を見させたのである。被術者は未だ曾て渡部氏に面會したことはない、又新

發田へ一回たりとも行きたることはない、然るに、その實驗は、的中した。渡部校長より報じ來りたること、千里眼で見た事とは、全く一致した。その事は、最新式實驗催眠術講義に記して置いた。どうして此實驗をするかといふに、被術者、否、此場合に於ては、術者といふが適切である。術者は眼を閉ちて、心を靜める。すると、夢の如くに、先方の様子が、眼に映するのである。その映するものが盡くれば、眼を開くのであるが、新發田への實驗の際、眼を開きて後、如何なる事をいふかといふに、「自分は上野から、新潟までの切符を求めて、汽車に乗込んだが、汽車の中で聞くと、新發田へ行くには新潟の手前なる新津で下車するがよいとのこと故、新津で下つた。それから後、かくくの道を取り、これこれの人に出合つた」と話す。これは夢の如くに感じたのであるが、私が嘗て新發田へ行きたることがあつて、その當時のことを、實驗中思ひ居りたるため感通したものである。私は上野から新潟までの切符を求

めたが、新津で下車すべしと汽車中で聞いた。又その道といひ、その出合つた人物といひ、皆私が記憶して居るまゝのことを話した。また之は近くのことであるが、神奈川縣高座郡溝村なる鳩川農業學校に於て、東京なる私の宅、よでの千里眼實驗を行つたが、男兒を女兒と見ただけの相違はあつたが、家族の數等は一致した。此場合は、千里眼といふよりも、十中七八までは感通作用であつたと思ふ。

(第四十一、暗室内の物品を持ち出す實驗) 一室を眞黒にして、その室内に、各種の物品を散在せしめ、一々命する物を持出させることができ。之は自宅などにて、たびく行ふ事であるが、公開席上では、暗黒にすべき室がないから、この實驗は行ひ難いが、嘗て秋田小坂鑛山本山小學校と、神奈川鳩川農業學校とにて、行ふことを得た。いづれも夜の實驗であつて、小坂は電燈を消し、鳩川では講壇の後方二階の登口が、暗室に代用するを得たから、行ふを得たのである。然かし、各種の物品を

散布せしむるまでに至らず、一の物品を置いて、室内に入るや否や、直にそれを手にせしめたのである。此暗室内の實驗は、視覺の敏といふことによりて説明もできるが、自分の經驗では、矢張精神作用の感通であると信ずる。

八) 人格變換の實驗

(第四十二、壯年を老人の如くにならしむる實驗) 一壯年を招き、其年齡を聞くに、三十二歳と答ふ。直に「三十二歳は、昔のこと、今は汝は八十五歳であるぞ、人間はウツカリすると、夙に年月を経過する。……汝は歩まんとするも、腰曲りて、ヤツトの事に歩む」といひ聞かせたるに、腰曲りて、老人の如き動作にて歩む。「汝の聲も、老人らしくなつた」といひて、年齡を問ひたるに、「八十五」と答へたる聲は、全くその年齡の老人聲となる。(埼玉縣川越中學校にて)

第四十三、他人に變ずる實驗) 前の壯年に、「汝は最早老人ならず、

併し、今は汝は東郷大將なり」といひ聞かせて、本人の姓を呼ぶも、返答せず、東郷閣下と呼びたるに、ハイと返答をする。その時、「閣下は、川越の何誰を知れるや」と、その本人の姓名を告げたるに、知れりと答ふ。「然らば、何誰は正直なりや」と問ひしに、正直なりと答へ、「勤勉なるや」と問ひたるに、「勤勉なり」と答へたり。(埼玉縣川越中學校にて)

(第四十四、一人にて、二人の働きを爲す實驗) 十五六歳の男子を呼び、「あなたは海軍々人である、歐米諸國を旅行したる軍人である。あなたは、一場の演説を頼まれて、今此所へ來たのである。此席に居合す人々は、あなたの演説を聽かんとして居る。あなたは、歐米旅行中の所感を述べるがよい」といひ聞かせたるに、被術者は立あがりて、卓上の水を呑み、一禮して口を開き、下の如く述ぶる。

被術者「諸君!!、今日はお招きに預つて、此所に來り、いさゝか歐米旅行中の所感を申述べて見たいと思ひます。私は、はじめ米國に渡り、それ

より獨逸に行き、第三に英國に行きました。英國へ行きて見ますと、青年はいづれも獨立の氣性に富み、勇氣は満々として居ります。これを日本青年にくらべると、我が日本青年は、大に遜色があると思ひます。何事も、他人に依頼して、勇氣が缺乏して居るではなからうかと思ふ。よろしく英國人に鑑みて、獨立心を發揮すべきである」

演説終りたる時、「あなたは、もう海軍々人でない、元の本人である、あなたは今何をして居られたか」と聞くと、「他人の演説を聽いて居りました」と答ふ。「どういふ人の演説であつたか」と問ふと、「海軍々人の演説でありました」と答ふ。(埼玉縣南埼玉郡岩槻町小學校にて)

心理學などで、二重人格とか、三重人格とかいふことを述ぶる。即ち一人にて二人の働きを爲すのが二重人格、三人の働きをするのが三重人格。第四十四實驗は、この二重人格を知らせるのである。第四十二、第四十三實驗の如きは、感化によりて人の性質を變せしむるを得るを示す

のである。人の性質にも、よいのとあしいのとがあつて、その悪いのは、矯正し難いのが多い様に、教育家等でも思ひ居る人が多いが、心理的感化によりて矯正するを得るのである。勿論如何なる性質の人でも、必ず之を矯正し得るとは、いはない。なれども、從來教育等の力で、到底矯正し能はずと思へるものでも、この心理的感化にて矯正し得るのである。剛情なるのを剛情ならしめざる様になし、意志薄弱なるを薄弱ならしめざる様に仕向け、不正直を正直ならしめ得るのである。第四十二實驗の如きは、輕浮なる人をして、いくらか老人の如く實着にならしめ得るを示し、第四十三實驗はあまりに實着に過ぐる如き人をして、軍人らしく活潑ならしめ得ることを示すものである。

それから又、前には心に思ふことが文字に現はることを述べたが、第四十三實驗は、これまた、心に思ふことを言語に現はす實驗ともなるのである。人格を變換して、そして本人の性質をたづぬると、正直であれば、

必ず正直と答へるが、不正直な人が、正直と答へたり、勤勉ならざるのに勤勉と答へるが如きことは決して無い。不正直ならば、必ず不正直と答へる。これによりても、人は心の内と外部とは一致すべきもので、徳義の必要なるを知り得るのである。此實驗にて罪人を白狀せしむることもできる。

(九) 殘續暗示の實驗

(第四十五、自ら知らずして、室内を整頓する實驗) 四十歳前後の紳士を招き、各種の實驗を行ひたる後、「汝は今實驗を終りて席に就くが、その後、私が手をたゞけば、汝は知らず識らず、その席を起ちて、卓上の植木鉢を下げ、その他、室内の物品を整頓する。されど、斯く、私にいはれたるを忘れて居る」といひ聞かせ、被術者が席に戻りたる後、暫くして、手をたゞきたるに、忽ち席を起ちて、命せられたる如く爲す。「何と思ひて、かく爲せしや」と問ひしに、「あまり取り亂れて居つたから」と答ふ、

「術者に命せられたるを知るや」と問ひしに、「知らず」と答ふ。(滋賀縣愛知郡立愛知實業學校にて)

(第四十六、水桶と杓とを持ち來らせる實驗) 二人の生徒に就て、二三の實驗を行ひ、然る後、「汝等が席に戻りたる後、手をたゞけば、小使室より水桶と杓とを持ち來るべし、されどかくいはれたることを、忘れ居る」といひ、座に就かせたる後、手をたゞくに、二人は走りて、小使室にいたり。水桶と杓とを持ち來る。(長野縣下高井郡立農學校にて)

殘續暗示に就て、下婢をして洗濯せしめたることを、既に述べたが、第四十五、第四十六は、それと同様である。明日の何時にいひても、その通りに爲すのであるが、それを短くして、手をたゞく時に、いはれた通り、併し、一度與へられたる暗示は、腦裡に存する。教育家諸君は、こゝを能く承知ありたい。よい加減なことを教へて、生徒が忘れたからそれでよい

と思ひてはならぬ。一時は忘るゝとも、其與へられたるものが、何時か働くに至るのである。故につとめて、慎重に教ふるを要する、扱然らば、何が故に忘れさせるかといふに、人からいはれたがために爲さないといふ性質の人がある。前に述べた下婢の如きは、即ち然りである。本人に於て、意識的でなくとも、人から命せられたことは、爲すを好まないのがある。さういふのは忘れさせて、自然と爲す如くに仕向けるのである。かく爲すことによりて、勤勉ならざる者をも、遂に勤勉ならしめ得るのである。今一つには、忘れたりと思ふても、腦裡に印象さるゝことを知らせるために、忘れさせたので、水桶や杓を運び來るが如きは、頗る滑稽に類するが、併しそれ程迄に感ずるといふところを見せたのである。

(第四十七、身分不相應の衣服を嫌はせる實驗) 之は何所で行つたとはいひ難い、たいていは、自宅で行つたのである。此頃、女學生などで身

分不相應の衣服を着するものが多い。それを教訓しても、あまり益のあるものでない。身分不相應の衣服を着するはよくないといふことは、他人から聞かされなくとも、本人は承知して居る。併し止められないのである。さういふのには、心理實驗を應用して、「汝は身分不相應の衣服を嫌ふに至つた」といひて、且いはれたるを忘れしめ、而して殘續暗示となりて効を奏する如くに仕向けるのである。私は十二名の女學生に、この暗示を與へ、内三名は無効であつたが、九名は全く効を奏した。又これまで着慣れざる衣服をも、殘續暗示によりて、容易に着せしむるを得るのである。之は拙著最新式催眠術にも記して置いたことだが、日本婦人で、洋服を着慣れない人は困るのであるが、それを或人が、暗示によりて、着易からしめたのである。私も之に就ては、數名に暗示を與へて、効を奏した。婦人洋服には、コルセットがある。それを適當に着用すれば、別に害があるでもないが、着け慣れないのは、いくらか、苦しく感ず

る。慣れないものは、窮屈なものである。日本の婦人がコルセットを用ふれば、初めは窮屈に感ずるが、西洋の婦人で日本婦人の大きな帯をした人が、窮屈でたまらないといった。然るに、西洋人は、コルセットに平氣、日本人は帯に平氣である。華族などの身で、どうしても洋服を用ひねばならぬのがある。それを初めからコルセットが窮屈でない様に暗示を與へることが出来る。以前のコルセットには、餘程無理なのがつた。さういふのは、如何に暗示を與ふとも、身體の爲には害であるが、近頃はさういふ無理でないのがある。併し、着け慣れない内は、窮屈だから、それをはじめより、窮屈ならざる様に、又洋服も着心地がよい様に、暗示を與へるのである。私は華族の夫人數名に、此暗示によりて効を奏した。又此の頃は女學生で、姿勢を善良ならしむる爲に和服の下に、之を着けて居るのがある。之がよくないといふ人が多いが、以前の如き無理なのなら勿論害であるが、適當なるのは害はない。男爵高木醫

學博士の説にも、「コルセットを用ふるために、英米の婦人は、近年は大に身の丈が伸びた」とある。又森林太郎博士の通俗衛生講話の中にも、「強き狭きコルセットは、廢すべきだが、適切なるコルセットは、害なきのみならず、下衣を支へるために、婦人には必要缺くべからざるものである」と記してある。婦人にして催眠術を行はんとするにも、泰然自若として言語に力のある所がなくてはならぬが、男子に比して、女子はその自若たり沈着たる所が足らざるために、能く行ふにいたらざるのが多いが、コルセットなり、又は他の腹巻かを用ひて、下腹に力を入れる事になると、氣が落着いて、輕々しくならず、爲に能く行ふを得るに至るのである。かゝる點からしても、コルセットといへば、ごんなのでも害と思つてはならぬ。寧ろ適切なるのを用ふるがよい。女學生でも、適切なるのを、袴の下に着けて、姿勢を良くせんとして居るのがある。又これあるがために、腰があたたまりて、冷えるのを防ぐ事にもなる。併

し、初め用ひて慣れない内に、都合あしいとて廢する位なら、最初より用ひないがよい、ところが暗示によりて、初めより身體に適合して、その益を知りて、少しも窮屈を感ぜざるに至らしむることができる。又暗示によりて、衣服着振のあしいのを、良くせしむることもできる。

(第四十八、酒を止めしむる實驗) 三十歳前後の男子に、「この酒は汝が平常飲む酒よりも、味大によし」との暗示を與へて、コップに一杯の水を與へたるに、被術者は其如くに感じたり。更に水を與へて、「この酒は、一層味よし」といひたるに、たしかに前よりは味よしといふ。第三回目には、「味は今層よくして、且匂ひが大層よい」と暗示を與へたるに、またその如く感ず。更に一杯の水を與へて、「之は味もあしく、臭氣もあしくして、到底口にするを得ず」と暗示を與ふるに、またその如く感じ、飲まんとして、飲むを得ず。この時「今のあしき味と、あしき臭氣は、忘たれど、汝は眼を開くや否や、卓上の水を酒と思ひて飲まんとす。そ

の時、今感じたる通りの、あしき味と臭氣を感ずべし」といひたるに、眼を開きて之を飲まんとして、飲むを得ず。「何故飲まざるか」と問ふに、味あしく、臭氣甚だしくして、飲むを得ずと答ふ。(下野國足尾銅山小瀧俱樂部にて)

(第四十九、煙草を止めしむる實驗) 被術者に、敷島を一本與へて、「平常の敷島よりは、舌さわりも、匂ひも、よし」といひたるに、之を喫して、その如く感ず。次回には、「一層匂ひよし」と暗示を與へたるに、又其如く感ず。第三回目に於て、「舌さわりも、臭氣も、頗るあしくして、喫するを得ず」といひたるに、その如く感ず。後、之を忘れしむる事、酒の場合の如くしたるに、被術者は眼を開きて、側なる煙草の臭氣あしきとて、之を取り捨てたり。(下野國足尾銅山小瀧俱樂部にて)

酒を止めしむるも、煙草を止めしむるも、これまた殘續暗示に外ならぬのである。今は眼を開きて後に、酒又は煙草を口にせしめたのであるが

眞に之を止めしむるには、凡ての事を忘れしめ、而して「汝が今後、酒又は煙草を口にせんとするならば、如何なる時、如何なる場合なりとも、味と匂はあしく感ずる」との暗示を與ふるのである。又凡てを忘れしめて酒や煙草に對して無頓着ならしむる暗示を與ふるもよい。その他、その人の性質如何によりて、種々なる方法があるが、今はその一方法を述べたるのみである。忘れさせるのは、前に述べたると一理由に基くのである。

(心理實驗練習の順序) 上に述べたる實驗の中、容易に行ひ得るものもあれば、容易に行ひ難いものもある、又上に述べたる外、諸種の實驗も行ふを得るのであるが、それらは最新式催眠術及び最新式催眠術講義をお讀みを願ふことにして、これからは、諸君が此心理實驗を練習せらるゝ心得にうつるとする、此實驗を行ふ順序をいへば、私の從來の經驗によるに、多くの人は、その身體の中で、皮膚と筋肉の感、殊に身體全

部の感が、第一に早く起るものらしい。即ち第廿六實驗の如きものは、たいていの人に就て、行ふを得るのである。この實驗の場合には、當人は自己の身體のみが動くものと思はずして、汽車が動く爲に自分も動くに至ると感ずるのである。多くの人は、かく感ずる。勿論人によりて、強く感ずると、弱く感ずるとの差はあり、速に感ずるか、徐ろに感ずるか、の別はあるが、たいていは、感ずる。中には、少しも感ぜない人がないではないが、其多くは、未だ能く心を靜めるに至らないのである。又身體が歩む事ができなかつたり、手が離れなかつたりする實驗も、身體全部の感であつて、之も實驗の順序からいへば、平易なるものである。併し、如何なる場合に於ても、暗示を與ふるにあたりて、その暗示が被術者に強く感せしむるものでなくてはならぬ。それには、術者は成るべく丹田即ち下腹に力を入れて、言葉を發すべきである。他の話ではあるが、故市川團十郎などの藝が妙に入るのは、舞臺に出で、丹田に心を注ぐ

からだといふ。學校教師として、教壇に立つにも、丹田に力を込めて、心をそれに注ぎつゝ、言葉を發するならば、必ずその言葉に、一種の勢力あるを、被教育者は感ずるのである。腹に力の入らざる人の言葉は、暗示として力強くないものである。故に此實驗を行ふにも、丹田に力を込め、氣をそれに注ぐことが、大切である。前に婦人などが此術を行ふに、コルセットが大に用を爲すといひたるは、このことである。之を用ふるために、自然と下腹に力を込めることができ、従つてその人の暗示は、被術者に力強く感ぜらるゝのである。必ず用ひざるを得ずといふのではないが、男子よりも女は、人を動かす威力に乏しい、同じい言葉を發しながら、能く人を感ぜしむることは、男子に及ばない。然るに、コルセットによりて、自然と丹田に力が入り、従つて氣をそれに注ぐことになるから、成功といふ上に於て、迅速である。多くの人は、知らないかも知れぬが、昔印度などにて、高僧が座禪をするにも、腹を締めて、丹田

に氣を注ぎたるものだといふ。古書を見れば分るが、近頃の書で、足立栗園君の著書、靜座内觀秘法といふのを見ると、その話が出て居る、「平日丹田に空氣を充たせて、心を專にすることが必要だが、よほど慣れないと、さういつも心をそれに専らと爲し難い。それ故、一種の帶を用ひ腹を締めて、丹田に空氣を充たせることを爲したるもので、之に慣るれば、心は落着き、又病も去ることある。参考の爲に、足立氏の著書を讀んで見らるゝがよからう。コルセットも之と同じ用を爲すのである。併し、くれぐれもいふて置くが、從來の如き狭い強いのは用ひてならぬ。又巾の狭いのもあるが、それは用ひて樂の様に思はれるが、反つて無理ができて、下腹の呼吸を防げることゝなる。身體に適合して、丹田の呼吸を助けるものでなくてはならぬ。如何なるものがよいかは、實物に就ていはねば分らない。此術を學ぶ上に、又は姿勢を良くする爲に、少しも害なきものを用ひたいといふ人があるならば、その適當なるのを

お見せすることは辭せない。

筋肉皮膚の感でも、寒く感じたり、あつく感じたり、又針を刺して痛みを感ぜなかつたりするのは、人數の上からいへば、いくらか少數である。振動を感ずる人の中でも、此感の無いのがある。又指頭でカードの形や活字を知るのは、餘程の少數である。肉筆の文字を知るのは、少しく練習すると、たいていはできる。又何等の練習もなくして成功する人も少くない。併し、諸君が此術を學ばるるに、歩むを得ず、起つを得ず、手が離れず等より、身體振動位に就て實驗するのである。併し、歩むを得ずなどの實驗は、動もすると、被術者を愚弄せんとする傾向を生じ易いが、左様なることでは、熟達は覺束ない。大に慎みて、被術者の爲を思ふでなくてはならぬ。歩むを得ずとて、身體を前へ出さんとする間、又は手を離さんとして力を入れ居る際は、血液の循環がよくなつて、運動同様の効あるものであるが、愚弄するが如き心では、いけない。さうい

ふ心を出さずして、ますく、血液の循環はよくなつて、頭は軽くなるよとの暗示を與へつゝ、行ふを要する。これを忘れてはならぬ。

身體全部の次は口の感である。水を湯と感じたり、砂糖の無いのに甘く感じたりするのである。口の次は鼻の感である。その次は眼である。即ち淺草觀世音などを見せる實驗を行ふのである、眼の次が耳である。音楽などを聴かせる實驗である。これ位な實驗を、順序を立つて行ふのである。諸君が練習を積まれ、又は被術者がよく注意がまとまりて、其感強きならば、如何なる順序にて實驗を行ひたりとも、敢て不可はないが、能く練習せざる間は、此順序に行ふのが、たしかである、實驗は何であらうと、術者は勤慎を旨とするを、瞬間も忘れてはならぬ。如何に丹田に力を込めたりとも、精神の勤慎ならざる人の暗示は、その力は弱いものである。動もする。人を愚弄せんとして、弊害を生じ、爲に催眠術は行ふべからずと禁じられて、心得て置べき心理作用までも禁せられ

て居つたのである。左様な愚を演じてはならぬ。

第七章 治療及び矯癖に關する心得

(心理治療に効ある病氣) 如何なる病氣が、心理治療の効あるやといふことになるかと、病名を一々舉げて、いひ難い、何となれば、精神によりて病を生じ、又は重からしむるものが、比較的醫藥の効なくして心理治療の効が多いからである。心そのものによるので、病そのものによるのではない。ただ大體をいへば、慢性のものは、比較的治し易い。それは精神が病を助けて居るからである。醫藥そのものが効なきにあらずして、患者の精神状態が、醫藥をして効なからしめて居るのである、胃の病でも腸の病でも、その他何病なりとも、慢性的のものは、効がある。それも、必ずあるとは、斷言し難い。術者を信せない時は、効はない。又病がよほど重くて効のないこともある。されど、重いものは効なしとい

ふでなく、非常に重いの中でも、容易に治するのがある。ごうも一概にはいへない。

今少し具體的にいへば、婦人のヒステリーの如きは、治し易い部に加へ得る。テンカンの如きも、比較容易に治し得る。その他の腦や神經に屬する病は、治し易い。リウマチスや脚氣の如きも治し難くない。寢小便の如きは、十中八九は、一回の暗示にて治し得るといふを憚らない。又身體各部の痛感を治させることもできる。齒の痛いなどにもよい。併し齒などは、一時痛みを去るのみだから、治療すべき部は、速に齒科醫の力に頼らねばならぬ。齒ばかりでない、凡ての病氣に醫藥を輕んぜない様にせねばならぬ。心理治療の流行もよいが、それがために、醫藥を廢する様な人の生ずるのは、喜ぶべき事でない。自分は信ずる。心理治療を業とする人の中で、醫藥を止めよなど、患者にいひ聞かすのがあると聞くが、さういふことは、頗るよろしくない。心理治療といふ事

は、患者をして醫藥を益々信せしめ、醫その人を信じ、従つてその人より與へられたる藥を信ずるによりて、平癒が速かであるといふことを、一般にさとりて貰ひたいのと、それに到底治せないときらめたる慢性的の病氣でも、あきらめるには及ばない、治する道があるといふことを、悟らせたいのである。これまで醫藥で何等の効なかりしものが、心理治療のみで、平癒するものもあるが、それがために、如何なる病も醫藥よりも心理治療といふのは、之はあやまれるものと思ふ。生理より來る病もあれば、精神上より來る病もある、精神のみと思つてはならぬ。されど、生理上にも、精神が加はつて居るから、生理上のものは、醫藥を主として、それを心理上で助けてゆくことはできる。又精神上からの病でも、生理上これを治するを助けることができる。互に相待つべきものであることを知らねばならぬ。

(心理矯正の効ある惡癖) 惡癖となると醫藥の範圍以外で、これこそ

専ら心理矯正によらねばならぬ。前章にて述べたる酒や煙草も、癖の中に加へてよい、又盜癖の如き、不良なる性質の如きも、矯正し得るのみならず、現に不品行に流れつゝあるを、勤慎ならしむることもできるが、これは容易といふよりも、寧ろ難い部に屬する。難いといふのは、矯正の見込なしといふのではない。短氣とか、又は急ぐべきに急がないとかいふのは、さう難くはない様である。前には、着慣れざる衣服を容易に着せしめ、洋服に慣れない婦人をして、暗示によりて能く着るに至らしめたる經驗があるといふことを述べたが、その如くに、衣服の着振をよくせしめ、又髪をよく結はざるを結ばせたり、不潔を何とも思はないのを、清潔を好むに至らしむることはできる、進んでは、惡癖矯正ではないが、書畫を巧ならしめたり、記憶力を強くせしめたりすることができる。従つて物忘れし易い人をして、忘れしめざる様に仕向けることもできる、されど、健忘症の人を治させるは、餘程の難事である。絶對的に

望みがないではないが、難中の難である。

(受術者の心得) 治療や矯癖を請求する人の心得を述べる事にする。中にはズルイ心で治療などを請求する人がある、殊に甚しきは、術者をヒヤカシ半分で来るのがある。これは言語同断である。「到底駄目だと、初めから思ふたが、果して駄目だった」などいふ人があるが、それは術者が拙なるといふよりも、受術者その人の心があしい。駄目だと思ひて来るならば、駄目であるのが、當然である。信を以て来るを要する。信が強いだけ効を奏することは、速である。又ヒヤカシ程でなくとも、あの人には治療料を取らないのだから、やつて貰ふなどの心もよくない。それでは、ズルイものといはねばならぬ。金を出さないといふのが主で、術者その人を信ずるのでないから、効はない。自分の経験によるに、さういふ人は、將に治せんとして治せない。信を以て来るならば、たしかに治すべきのが、信が足らない爲に、そこまですら直らない。金の出

す出さぬは、どうでもよい、貧なる人でも、「どうぞ直してください。あなたでなくてはならぬ」といふ心で来るならば、治し易いが、金を出さないからといふのは、信になつて居らぬ。凡て慾深い性の人は、他人を信するよりも、自分勝手が多し。ために治療矯癖、いづれもその効は薄い様である。

又本人は能く信じて、両親や主人が、それをヒヤカシては、キ、メが薄い。殊に「何んだ、そんなことでもよくなるものか」などいはれては、將

によくならんとして居るのも、治せざるにいたるのがある。扱又一回の暗示にて、病は平癒し、悪癖は矯正し得るものもあるが、數回は思か、數ヶ月間も引續いて暗示を與へて、初めて効あるものもある、それを一回にて治せないからとて、これは「効がないのかしら」など思ふのは、よくない。又暗示の當時に効なくして、數日の後に於て、効の現はるゝのものもある。それをその當時に効がないとて、到底見込はないなど

思ふのはよくない。一旦治したるのがもとにかへるといふのは、多くは疑念の爲である。もとにかへるべきものでないのに、世には心理治療はもとにもごるもの、如く思ふ人があるが、それは大なる心得違ひである。

心理實驗は教育上大切なる心得である。されば、學校或は教育會或は其他の團體より要求あるならば、遠近を論せず、成るべく都合して其要求に應ずる本意である。但本書五九頁及び六〇頁を一讀の上にて要求ありたし。

村上辰午郎

村上式催眠術終

大正三年十月十五日印刷
大正三年十月二十日發行

郵正料價 二四拾錢

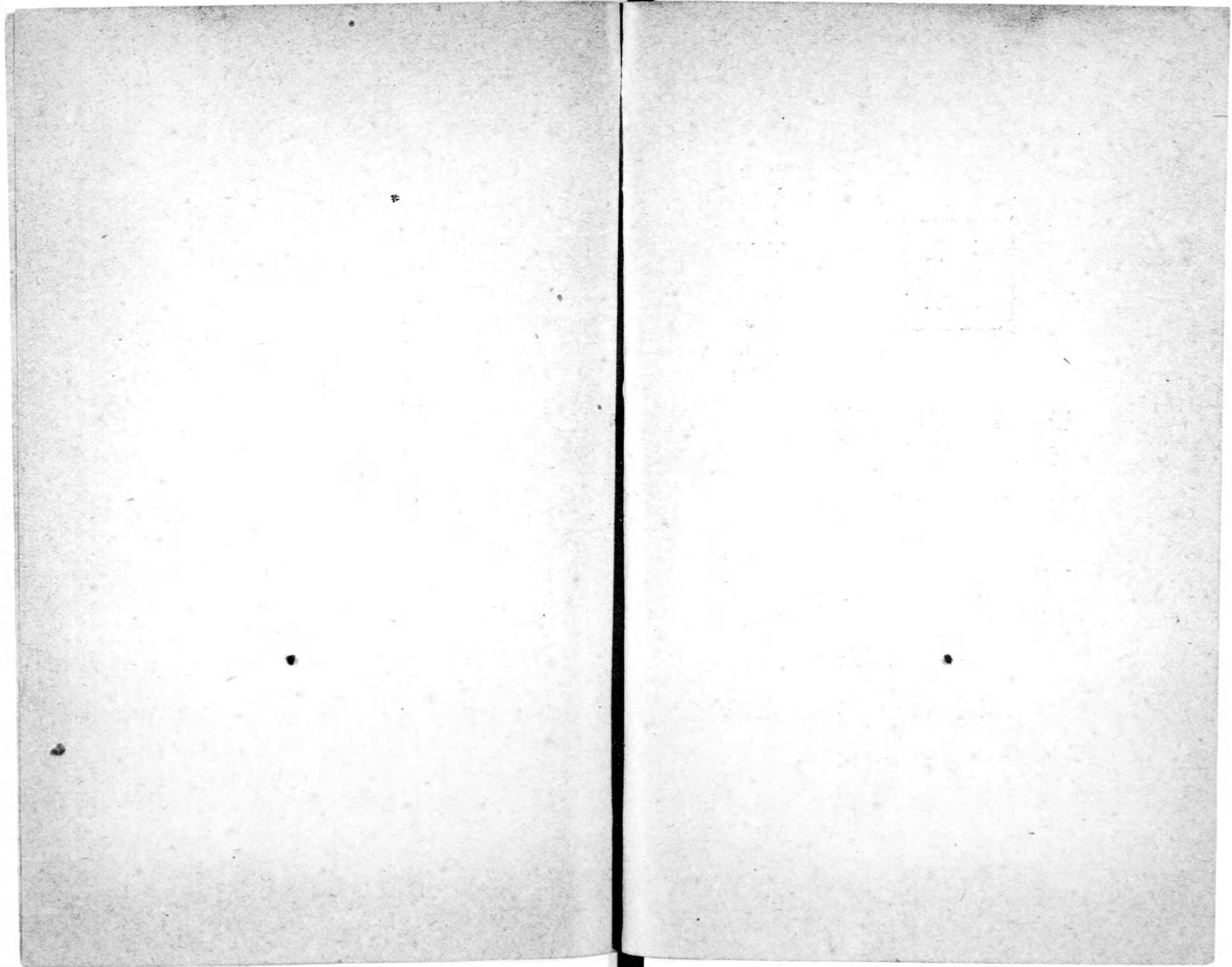
著者兼發行人 村上辰午郎
東京市麴町區下二番町七十番地

印刷人 堤崎精次郎
東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所 公木社

發行所 東京市麴町區下二番町七十番地
大正婦女社會
振替口座東京二〇五九九番

複製 不許



274
1098

終

